
恋する資格

君野仁義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する資格

【Nコード】

N0396V

【作者名】

君野仁義

【あらすじ】

恋人を作る資格がないと言う少年、仁人は図書館長を務める美少女、椎菜に一目惚れしてしまう。しかし、資格がないとその感情を押し殺そうとする。それに気付いた親友、貴士がグループデートを仕組む。そこで椎菜は次第に仁人を知って、惹かれていく。椎菜の人氣に目をつけた生徒会長、光義が打算的に近付き、付き合うよう迫る。光義に告白されて、椎菜は仁人のことが好きだということに気付く。次の日、椎菜は仁人に告白するが、『常に相手している時間がないから』資格がないと振られてしまう。めげない椎菜はその

後も仁人へ猛アタックを続ける。ひたむきな椎菜の姿に光義も本気で好きになってしまう。仁人も何が資格なのか悩み、考える。常に相手ができないから資格がないと言う仁人の過去の話を聞いた椎菜は部活中の仁人の元に駆けつけ、説得し自分が猛アタックする理由の過去話をする。しかし、仁人はなかなか決断しない。落ち込む椎菜を見かけた光義は椎菜をデートに誘う。振り向かない仁人を諦めかけていた椎菜はつい乗ってしまうのだが、そのデート現場を仁人に見られてしまう。絶望して去っていく仁人の姿を見て、椎菜は本当に好きなのは誰かを再認識する。椎菜と光義のデートを目撃した仁人はさまざまな感情に苛まれ、苦しむ。そこで椎菜のことが好きだと確信する。迷いが吹っ切れ、再認識した椎菜は仁人を強引にクリスマスデートに誘う。クリスマス前日、デートのことを知った光義は仁人の前に現れ、発破を掛ける。仁人は悩み、もがいた結果、本当の資格とは何なのか見出し、決心する。クリスマス当日、仁人と椎菜はウブながら、温かい高校生らしいデートをする。最後に、夜景を見るために丘の展望台にやってくる。そこで、椎菜はまた告白しようとするが、途中で仁人に止められる。仁人は自分の想い、見出した本当の資格『本気で愛すること』を伝え、椎菜に告白する。

上

プロローグ

寒気を含んだ風が学校の屋上を通り過ぎていく。屋上には夕陽によって長くなった影が二本伸びている。麓の町並みがぼつぼつと色付き始める。山間に隠れようとしている夕陽が屋上の様子を覗き見している。

「先輩……」

伸びている影の少し短いほう、小柄な女の子は気恥ずかしさが見え隠れする声を細々と上げる。その呼びかけに長いほうの影、スポーツ刈りに揃えられた短い髪が立っている少年が真っ直ぐ女の子を見つめて応える。

「私、その……」

「うん」

詰まりながらも言葉を紡ごうとする少女を少年は優しい瞳で静かに見つめる。少女の顔がほのかに赤くなっているのは夕陽のせいか、はたまた別の理由か。

「先輩……私、その……先輩のこと……」

少女は勇気を振り絞ってその先を告げようとするが、やはりどうも止まってしまう、顔を伏せてしまう。少女の中で、言いたい気持ちと言ってしまった先の予想がせめぎあいが続けている。

少年は手持ち無沙汰になり、一番星が自己主張を始める、夜と夕方がせめぎ合っている空を見上げる。

「宮前先輩、私……先輩のことが好きです」

俯いていた頭を急にあげて、少女はついに決着をつける。自分の気持ちと現実には。

「そう」

少年は見上げていた顔を少女に戻し、少女の必死の想いを短い言葉で受け取る。少女の顔は夕陽に負けないくらい赤くなっていた。その瞳にはほんの少し涙らしき滴が浮かんでいる。

「好きです、先輩！」

一度言うとは大胆になれるのか、次は大声で叫んでいた。少年は静かにうなづく。

「……ありがと。嬉しいよ」

「じゃあ……」

すでに泣きそうになっていた少女はかわいらしい笑顔を浮かべる。その笑顔に少年は少し罪悪感を覚える。

「でも、ごめん」

「えっ」

笑顔のまま固まってしまう少女。少年は悲しそうな、困っているようなあいまいな表情を浮かべる。

「その……僕を好きになってくれた気持ちは素直に嬉しい。でも、悪いけど、僕は付き合えない」

少年は言いたくないけど、言わないといけない言葉を胸の痛みを感じながら紡ぐ。少女の足元に一滴の雫が落ちてシミをつくる。

「それは私が……」

少女は震えた声でしゃべろうとするが、それも途中でできなくなってしまう。

「違うよ。君のことはかわいいと思う」

「じゃ、じゃあ、他に……好きな人でも……いるんですか？」

瞳からあふれ出る涙を拭わずに少女は詰まりながらも、涙声で最後の希望に身をゆだねる。少年はゆっくりと、相手に聞かせるためより自分自身に沁み込ませるためにゆっくりと口を開く。

「僕には……ないんだ」

「ない？」

覚悟していたが、やはり少女の表情に心が痛む。けど、少年は少女の眼を見つめて一呼吸の後、さらに言葉を紡いでいく。

「僕にはないんだよ。恋人を作る資格が、付き合える資格が」
少年は寂しそうな微笑を浮かべる。すべてを諦めているような、
悟ったような、哀愁漂う笑みである。

「だから、ごめん」

少年は最後にそれだけ告げると、少女の脇を通り抜けて屋上から
姿を消す。影ができない闇に少女は一人取り残され、半分ほどこ
ない月に見守られる。

第一章

多くの生徒が葉を落とした桜並木の坂道を登っていく。ある者はだ
るそうに自転車を押しながら、またある者たちは楽しくしゃべりな
がら、またまたある者は寒そうにポケットに手をつ込みながら歩
いている。体育祭も文化祭も終わり、今学期学校行事も残ってい
るのは期末試験くらいだからか、それとも寒さのせいか、どことなく
侘しさが感じられる。

「先輩、おはようございます」

「ああ、おはよう」

後ろからかけられた元気な声に振り向きながら、みやまえ宮前 きみひと仁人は自
転車を押している手を片方離して応える。そのついでに落ちかけて
いた左肩のスポーツバッグをかけ直す。

身長、百七十後半。スポーツ刈りの短髪がツンツンと天に向かっ
て立ち上がっている。制服の上に何も羽織ってこなかったことを若
干後悔している。

坂の先を眺めるとため息がもれ出てしまう。枯れ葉をさらうこと
に専念する風が仁人の体温も奪っていく。身震いした後、仁人は生
徒の流れに乗ってゆっくりと坂を登っていく。

坂を登りきった先、みつが丘にある三つの丘の一つ、小高い丘の

頂上にあるのが仁人たちが通う星鈴高校^{せいりん}である。広大な敷地面積を有し、文武両道を掲げているため部活動も盛んで、たまに全国大会出場の垂れ幕が下がっている。

一年以上登り続けている坂に登りきった仁人は自転車を校門脇の駐輪場の空いているスペースに置き、赤レンガの校舎のほうへと歩いていく。

「L字型をした校舎と文化部部室棟に囲まれた中庭で何人か友人に会い、朝の挨拶を交わしていく。」

「よう」

「ん？おはよ」

右肩を叩かれた仁人が振り向くと、一年の頃からつるんでいる友人、黒松^{くろまつ}が手袋で覆われた手を挙げて挨拶してくる。黒松は少し歩幅を広げて仁人の隣に並ぶ。

「今日は一段と寒いな」

「もう冬なのかな」

仁人は空を見上げる。どんよりとした雲が太陽を隠そうと躍起になっている。

「そーいや、今日は全校集会があるんじゃないかったか？」

「そうだった」

「絶対寒いだろうなあ、体育館。我々は床暖房を要求する」

「床暖房の体育館なんて聞いたことない」

仁人は呆れながらも楽しそうに黒松と会話して玄関で上履きに履き替え、教室までの短い時間を過ごす。

教室の手前で黒松と別れた仁人は自身の教室に入っていく。クラスメイトたちと挨拶を交わしながら席に着く。

教室内は朝の短い時間をも無駄にできないと、女の子たちがグループになって無駄話に花を咲かせている。

「ええ、椎菜^{しいな}、昨日のドラマ見てないの？」

「うん。いろいろ準備が忙しかったから見れなかった」

「じゃあさ、私が貸してあげるよ。ブルーレイに録ってあるからさ」
「ありがと、助かる」

少女たちの甲高い声を特に気にも留めず、仁人はスポーツバッグを机の横にかけると、ぼんやり窓の外を眺める。

冬らしい厚い雲が太陽を隠そうとしている。ついこの前までは夏みたいに暑かったというのに、いつの間にか冬の装いになっている。今年は秋という季節をどこかに置き忘れてきたのだろうか。

「さっさと春が来ればいいのに」

「春が来たら、俺たちも高校三年生。受験生だぜ？」

「それは困る」

仁人のぼんやりとした独り言にツツコミが入る。仁人は特段、その人物のほうを向こうともせず窓の向こうを眺め続ける。

ツツコミを入れた生徒、紀三井寺きみいでら 貴士たかしも気にせず同じように視線を窓の先へと向ける。

「まあ、早い奴はそろそろ始め出すけどな、受験勉強」

「僕たちはそんな勤勉少年じゃないだろ？」

「ごもつとも」

この時点になって、ようやく仁人は勤勉少年じゃなくせに学年上位である貴士のほうに視線をやる。貴士はうんうんと何度も納得顔で頷いている。中学時代からの付き合いで、部活ではコンビとして活躍する親友である。

貴士は眠そうな顔であくびをかみ殺す。おそらく徹夜でゲームでもしていたのだろう。鞆を床に置き、仁人の前の席に座る。もちろん、貴士の席ではない。

「で、昨日、コクられたんだって？」

「あいかわらず情報が早い」

「情報は世を渡る上での武器だからな」

仁人の呆れ顔に貴士はニカリと笑いかける。仁人は深いため息をつく。

「で、どうせまたフったんだろ？」

「ああ」

「やれやれだぜ、まったく」

貴士は呆れるようにため息をつき、わざとらしく肩をすくめる。

「だって、女子新体操の一年で一番かわいって評判の植田うえだ 那波ななみを振るなんてもったいない。正気の沙汰とは思えないな」

「正気じゃないくらいの自覚はあるつもりだ」

「言いたいことは分かるが、深く考えすぎだぜ？」

「お前みたいに楽天家になれたらよかったんだがな」

「褒めても何も出ないぜ？」

貴士はなぜか逆に手を差し出して、何かを要求してくる。仁人が再びため息をついたところでチャイムが鳴り、担任教師が教室に入ってくる。貴士をはじめ、クラスメイトがあわただしく自分の席へと戻っていく。

担任教師が簡単な連絡事項と出欠確認を行うと、月に一回ある全校集会のために体育館へと移動する。教室から渡り廊下を通じてクラスごとに列を成して体育館へと向かう。

「さすがにもう裏庭で弁当食うのは無理だな」

貴士が渡り廊下の左手に見える裏庭をぼんやりと眺めながら漏らす。落葉絶頂期にある木々に囲まれた噴水がもの悲しげに佇んでいる。

体育館に入ると、既に他クラスが指定された場所で待機していた。床には汚れ防止用のシートが引かれているだけで、当然ながら床暖房なんてあるわけがなく、床からはひんやりした冷気が感じられる。仁人たちも指定された場所で体育館の寒さに文句を言いながら待機する。

「これより全校集会を始めます」

生徒たちが寒さに震えている中、生徒会副会長である後藤ごとう 美夏みか

の整然とした司会で全校集会が開始される。ざわついていた体育館が静まり返る。

「最初に校長先生のお話です。校長先生、お願いします」

精悍な顔をした年齢の割に若々しい初老の男性が恰幅のいい身体をゆったりと壇上へと向ける。生徒だけでなく教師たちにも緊張が走る。

「ええ、別に話つてのはいんじゃないじゃが……」

ひよろひよろした声がスピーカーから流れる。壇上にはもちろん校長以外に誰もいない。司会の後藤もマイクのスイッチを切っている。

「最近、急に寒くなってきたので、みなさん、風邪などを引かないように気をつけてください」

外見からは想像できない校長の声が体育館全体に響き渡る。話はないとか言いながらも校長の話はその後十五分ほど続いた。

校長の話が終わった後、クラブ活動などの賞状が壇上で校長から再度授与され、教頭先生からの連絡事項などが行われた。集中力が切れた生徒たちから怠惰な雰囲気の流れ出し、伝染していく。

「続きまして、図書館長からの連絡です」

司会の言葉を受けて、隣で待機していた一人の女子生徒が歩き出す。

少女が一步、一步足を踏み出すごとにミニスカートが翻り、綺麗な太ももがチラリチラリと見え隠れする。白のハイソックスがすらりと伸びる脚を膝上まで隠す。少女が壇上に近づくにつれて、体育館の空気が少しずつ変化していく。

「みなさん、おはようございます」

少女の耳に心地よいソプラノボイスの凜とした声がスピーカーを通して体育館全体に響き渡る。それは少女の雰囲気をそのまま表したような声で、だらけていた生徒たちの目を覚まさせるような一声だった。

「ん？」

「どうした、仁人」

先ほどまで完全に退屈そうにバスケットゴールを眺めていた仁人が意識を惹かれるように壇上に注目したのを貴士は目聡く気付く。貴士も壇上に立つクラスメイトに視線を向ける。

「図書館長の綾瀬あやせ 椎菜しいなです」

シヨートヘアーにカットされた黒髪をサイドでポニーテールにくくり、美人って表現よりかわいいという言葉のほうが似合っている。その大きな瞳は物怖じもせず体育館全体を見渡している。学校指定のセーラー服だというのに、他とは違い、どこか気品が感じられる。

「なあ」

「ん？」

仁人の異変に気づきながらも、貴士はそっけない態度で返事する。仁人は壇上から視線を外さない。外せない。仁人の頬が少し赤身を刺しているのは寒さの影響だろうか。

「誰だ？」

「誰って、クラスメイトすら覚えてないのかよ」

珍しく貴士がため息をつく。そんな様子すら仁人には目に入っていない。

「綾瀬 椎菜。図書館長を務める。性格は明るく活発的で、多くの生徒からの人気は高いし、人望もある。きっちりと仕事をこなし、成績も優秀だから教師からの信頼も厚い」

「お前とは逆だな」

「うるさい」

貴士が小さく怒鳴ると、担任からキツイ視線をもらう。

「ま、いわゆる学園のアイドルって奴さ。なんせかわいいからな」

貴士は頬をだらしなく弛ませて、椎菜に視線を送る。多くの男子生徒が貴士みたいなのは言うまでもない。

「ふん」

仁人は興味ない素振りを見せようとしているが、視線は壇上に立つ椎菜の姿に五寸釘で固定されている。

視線を外すことができない。動悸が激しくなっていく。どこことなく体が熱い。仁人はこの不可解な現象に身に覚えがあった。

でも、僕は……

仁人のそんな状態に気づくわけも気にするわけもなく、椎菜は悠然と演説を続ける。

「――以上、図書館会からでした。みんな、もっと図書館に来てね」
椎菜はフレンドリーに締めくくると、そのままトテテ壇上から降りていく。何に対してか分からない拍手が体育館全体から沸きあがり、椎菜はそれに対して笑顔で手を振って応える。校長も緩んだ頬をそのままに懸命に手を叩いている。

「これで全校集会を終わりたいと思います。各クラス、順番に退出して行ってください」

拍手が小さくなるのを待って司会が締めくくると、順番など守られるわけもなく、生徒たちは思い思いにダラダラと教室へ戻っていく。仁人は一人で早々に体育館から抜け出した。

外に出ると寒風が仁人の体温を奪っていくが、それに心地よさを感じる。頭を冷やすにはちょうどいい。仁人は教室に戻る生徒の流れに乗って校舎に入っていくが、教室には戻らず階段をさらに上がつて屋上に出た。

「そうだった……」

仁人は屋上の扉を開けてようやく昨日の放課後にここであったことを思い出し、場所の選択を微妙に誤ったことに気付く。しかし、別の場所に移動するのも億劫なので、そのままフェンスにもたれかかり、空を見上げる。

仁人はまだ心拍数を通常数値に戻す事ができていない。病気でもないのに胸が苦しみを訴えてくる。壇上で堂々と演説していた少女の姿が脳裏に焼きついて消えない。

「綾瀬……椎菜か……」

身体を捻って、視線を校内だけでなく、みつが丘の町からでも目立つ図書館に向ける。円柱の上に潰れた円錐が乗ったような形で、地上四階地下一階の構造をしている。先端についた時計は校内のどこからでも見えると言われている。

壇上で全校生徒相手に臆す事もなく話す堂々とした態度。最後をフレンドリーに締めくくった人懐っこさ。サイドポニーに結われたショートヘア。あの笑顔が優しく微笑み続ける。

「僕には……そんな資格はないんだ」

抱いてしまった想いを振り切るかのように呟き、身を翻して図書館に背を見せる。冷たい空気を肺一杯に吸い込み、すべてを吐き出すように深呼吸する。視線を落として腕時計を見るとすでに次の授業開始三分前を指していた。

「やばっ!？」

仁人は急いで教室に戻っていく。

なんとか間に合った授業をぼんやりと仁人は聞き流す。期末テストが迫っているが、仁人にとってはどうでもいいことある。だから、教師が懸命に黒板にチョークを走らせているにも関わらず、仁人はシャーペンすら握っていない。

「ここ、今度の期末に出すからしっかり抑えておけよ」

教師が注目を集めるために指示棒で公式を指し示し強調する。生徒たちもそこに視線を向けて、必死にノートにその内容を書き込む。しかし、仁人の視線はそこには向かっていない。呆けたような瞳で最前列に座る椎菜の後ろ姿を眺めている。

椎菜は仁人の視線に気付かないで、真剣な顔つきで版書に励んでいる。たまにシャーペンの端を口元に持ってきて考え込んでノートに何かを書き込んでいる。その仕草があまりにも絵になっていて、仁人じゃなくてもつい見惚れてしまう。

頬が緩んでしまっていることに仁人がはっと我に返って気付き、

慌てて誤魔化すために外に視線を移す。

「あいつがねえ……珍しいというか、あの時以来初めてじゃないか？」

教室の一番後ろからその様子を観察する貴士は自然を装う不自然な親友を眺めながら、どうするかなあと考えを巡らせる。

午前中の授業を消化してようやく昼休みとなる。チャイムと同時に教室内は一気に騒がしくなり、女子たちは机をくっつけて寄り集まり、男子たちは購買へと駆けていく。

仁人が登校途中で買ったコンビニ袋を鞆から取り出していると、貴士と黒松がそれぞれ弁当を片手にやってくる。

「今日はどこで食うんだ？」

「さすがに外はもう寒い」

「寒いだろうが、人はいないだろうよ」

「寒いのに外で食う物好き以外はな」

「じゃあない、ここで食うか」

貴士は隣の席の机と椅子を無許可で持ってきてくっつけ、椅子を前の奴からも拝借して人数分揃える。黒松は呆れながらもさっさと椅子に座り弁当箱を広げる。

三人はそれぞれの昼飯をつつきながら雑談に花を咲かせる。そういった意味では教室はオランダのキューケンホフ公園だ。

「今日の練習はどうするんだ？」

「昨日と同じメニューにしようかと思う」

「キャプテンでもないのによくやるよ」

黒松が仁人に呆れながら卵焼きを口に頬張る。

「どうせなら最後の一年くらい勝ちに行きたい」

「弱小から勝ち上がって行くってのはロマンがあるよなあ」

「可能なのは漫画かドラマの世界くらいだよ」

「松は手厳しいねえ」

貴士がとぼけたように自分の頭を軽く叩く。仁人は静かに二つ目の菓子パンを開封する。

「で、強豪空手部さんは最近どうなのよ」

「先輩たちがいなくなってからはいいたことないさ。正確には会長が、だけど」

「空手部元エースで生徒会長の六十谷 むそた 光義先輩か」

「そそ。彼の強さは本物だったね。話では空手がやりたくてここに入学したらしい」

「この学校、設備だけは揃っているからな。食堂は『食堂』という名の空間に成り果てているが」

資金難のため運営が難しくなった食堂は現在閉店中で、場所だけの解放となっている。購買でパンを買った生徒がそこ食べたりしている。

「今時、資金運用で株はないわ、株は。せめて韓国株とかにしとけよな」

貴士が鳥の唐揚げを指した箸を振り回しながら、食堂の、ひいては学校全体の資金難の原因に対してぼやく。黒松もうんうんと納得顔で頷く。

「って、聞いているか？」

「ん？ ああ……」

貴士に突然話を振られた仁人は驚いて、咄嗟には生返事しか返せない。

「どうした？ ぼうつとして。らしくもない」

何も知らない、気付いていない黒松が心配そうに仁人を伺う。事情をそれなりに察している貴士は何も言わない。

「いや、なんでもない」

今までしていたことを誤魔化すように勢いよくパンへとかぶりつく。疑問符を浮かべる黒松はとりあえず仁人が眺めていただろう方向に視線を向ける。その先には教室の前方で固まる女子のグループがあり、その中心には椎菜の笑う姿があった。

「？」

ますます疑問符を浮かべる黒松。

「ま、いいか。それより、今度の土曜はどうすんだ？あの映画、ついに公開されたが」

「ああ、あの前評判が悪かった映画か」

「そう聞くと見たくなる」

「そう？私は見たいけどな」

突然の声に三人とも顔をあげ、珍入者を確認して三様の反応を示す。黒松は驚き、貴士は笑みを浮かべ、仁人は呆然としてしまう。見られた方は「どうしたの？」と言いたげに小首をかわいらしく傾げている。

「椎菜、驚かすなよ」

黒松がどうにか抗議する。その不満を漏らす声に少し親しさが見え隠れする。

「驚かしたなら謝るよ。ごめんね」

椎菜はかわいらしい舌をちょっとだけ出して、おどけながらも謝ってくる。

「なんか、さっき、こっち見ていたから、何の話してるのかなあて思って」

「別に見てねえよ」

「そう？」

椎菜は答えた黒松ではなく仁人の顔を見る。仁人は照れるように曖昧な笑みを浮かべる。笑みを浮かべているが、内心では冷や汗が溢れている。

「何？」

「や、あんまり宮前さんと話す機会ってなかったなあって」

「そうかなあ」

実際に二人が言葉を交わしたのはこれが初めてである。片方は今朝まで知らなかったのだから当然である。

「このクラスになって半年以上になるのに不思議」

「そうだね」

緊張してほとんど生返事状態の仁人。またあの不可解な胸の痛みが襲ってくる。今回はちょっとした息苦しさも覚える。

教室の入口の方から椎菜を呼ぶ声が聞こえてくる。

「あっ、ごめん。これから図書館会の仕事があるんだった。よかつたら、今度、図書館に来てね」

椎菜は見る者全てを魅了するほどの笑顔を浮かべながら手を振って、教室のドア近くで待つ女子のところへと走っていく。そのまま連れだってどこかへと歩いていった。仁人はその様子をぼんやりと眺める。

「あいつは何がしたかったんだ？」

「さあな」

同じように椎菜の後ろ姿を眺めていた黒松が漏らし、貴士はニヤニヤと気味悪い笑みを浮かべる。

結局、土曜日の予定は確定せず、とりあえず映画ってことで昼休みが終わり、午後の授業が開始される。やはり仁人は教師の話を左から右へと聞き流し、視線を教室の最前列と窓の外を行き来させる。退屈な授業も本日の分をようやくすべて終え、担任が連絡事項だけを伝えるホームルームを早々に切り上げて、放課後になる。

「本日も一日、お勤めご苦労様でした」

貴士がわけの分からない挨拶とともに薄っぺらいスクールバッグを持って、仁人の席までやってくる。仁人は机に突っ込んでおいた教科書などを鞆に詰め込んでいる途中である。

「部活に行くか」

膨らんだスポーツバッグを左肩にかけて立ち上がった仁人を貴士は右肩を掴んで引き止める。

「どうした？」

「いや、伝え忘れていたんだが、今日はバスケット部は休みだ」

「はい？」

「顧問の先生が急用で不在となるから休みだとさっき聞いた」

そんな話聞いていないと思っていたところに放送が入り、男子バスケ部の練習がなくなったことが知らされる。

「な？」

仁人は貴士のドヤ顔に呆れながら、放課後をどうやって過ごそうか考える。

「ちなみに、俺はこれから用があるので失礼させてもらう」

仁人が遊びに誘おうとする前に、貴士はじゃ！っと片手を上げて教室からいなくなる——と思ったら、すぐに戻ってきた。

「忘れていた。これ、図書館に返しといってくれ」

貴士はハードカバーの本を二、三冊鞆から取り出すと、仁人に押し付けてくる。

「なんだ、これ」

「頼んだ」

仁人の言葉を無視して、またすぐに教室からいなくなる貴士。残された仁人は反射で受け取ってしまった本のタイトルを見る。

「『これであなとも止められる禁煙セラピー』？何を読んでいるんだ、あいつは」

その他もよく分からないタイトルばかりだったので仁人は深く考えることを止めて、図書館へと向かうべく教室を後にした。

教室のある校舎から渡り廊下を渡るとすぐに図書館がある。渡り廊下からは図書館の隣に立つ生徒会専用の建物、通称『御殿』が見える。そこには生徒会室があり、過去の資料や資材が多く保存されている。

図書館の入口で仁人は見上げる。他を圧倒するように聳え立つ図書館は空に突き刺さらんと天を突く。校内どこからでも見える時計もさすがにそこからは文字板を読むことはできなかった。

「そういや、図書館なんて初めて来るかもしれない」

別に読書が嫌いってわけではないが、進んで読もうともしない仁人はこの二年間、図書館を利用することはなかった。入学当初に案内された時に立ち寄ったくらいである。少し緊張しながら図書館の扉を押し開ける。

入口を入るとすぐ右に受付カウンターがあり、中央にはいくつかの長机が配置されている。そこでは何人かの生徒が本を読んだり、勉強したりしている。放射状に本棚が並び（壁沿いにもびっしり）様々な分野ごとに仕分けされている。一階から二階の中央部分は吹き抜けになっており、二階は壁沿いだけに本棚が設置されている。

「どう？すごいでしょ」

図書館内部の壮観に唖然として立ち尽くしていた仁人に椎菜が笑顔で話し掛けてくる。

「ああ」

仁人は誰と話しているか分からずに返事する。中学までの図書室との差に愕然とし、これほどの本を誰が必要とするのだろうかと思ってしまう。

「君が図書館に来るなんて珍しいというか、初めてじゃない？」

「初めて……って、綾瀬さん！？」

そこで初めて話している相手に気付いた仁人は焦って大声を出してしまう。図書館中から厳しい視線を集めてしまう。

「ここは図書館なんだから静かに、ね？」

「ごめん」

椎菜に窘められて、仁人は少し恥ずかしいながらも素直に謝る。

「よろしい」

椎菜は出来のよい生徒を褒める先生のごとく、嬉しそうに笑顔を浮かべる。見ているこっちまで嬉しくなりそうなほどである。

「で、何しに来たの？」

「そうだった」

そこでようやく、仁人は自分がどうして図書館に来たかを思い出

して、貴士から受け取った本を取り出す。

「返却を頼まれたんだけど」

「こっちょ」

椎菜は手招きして受付カウンターへと歩いて行く。仁人はその後ろを静かに付いて行き、返却カウンターの前に立つ。

「お願いします」

「はい」

椎菜は仁人から本を受け取ると、手慣れた手つきで返却作業を進めて行く。仁人はその様子を、椎菜を見守る。

椎菜のしなやかな指先が分厚いハードカバーを掴み、裏に付いているバーコードを読み込んでパソコンに情報を取り込む。それをモニターで確認してから、キーボードのエンターキーを叩く。

「これでおしまい」

ものの三分もかからない間に返却手続きは終了する。椎菜の仕事ぶりに魅了されてか、椎菜自身に魅了されてか、仁人は完全に見惚れてしまっていた。

「終わったよ？よかったら、今度は君自身が借りてくれたら嬉しいな」

椎菜は仁人の様子を不思議に思いながらも、仁人に親しみを込めて微笑みかける。仁人は心拍を一回ほど忘れてしまう。

「じゃあ、僕はこれで」

「また明日」

小さく手を振ってくる椎菜に仁人は右手を挙げて応えて、擦れ下がった左肩のスポーツバッグを直しながら図書館から出て行く。

図書館を後にした仁人は一回体育館に向かったが、本来バスケット部が使うはずだった場所はすでに女子新体操部に占領されていたので大人しく帰ることにした。

学校から自宅までは自転車です十五分くらいの距離である。それも

あつて仁人は星鈴高校を選んだ。

「ただいま」

「おかえり、今日は部活じゃなかったの？」

リビングに入って行くと、母親がワイドショーの片手間に洗濯物を畳んでいた。仁人はバッグを床に置くと、キッチンへと入って行き冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出す。

「顧問が急用で休みになった」

コップの半分くらいまで注ぐと一気に飲み干す。母親は「手も洗わないで」と思いながらも何も言わない。コップを流し台に放置し、仁人はそのままバッグを回収して二階にある自室に上がってしまう。自室のドアを閉めると同時にバッグを放り投げ、制服のままベッドへ仰向けに倒れ込む。

「綾瀬……椎菜か……」

今日知ったクラスメイトの名前をぼんやりと呟く。特に何の意味もないと仁人は考える。なのに、浮かんでくるのはあの可愛らしい笑顔。

「でも、僕は……僕には……」

頭を振り、雑念を追い出して真っ白にしようとする。しかし、視界だけがぶれるだけで、なかなか消え去ってくれない。

「晩飯まで走ってくるか」

ベッドから立ち上がった仁人は手早く制服を脱ぎ捨てると、愛用のジャージに着替えて部屋を飛び出していく。

翌朝、仁人は眠たそうな顔で自転車を片手に桜並木を登っている。今日は制服の上にコートを羽織り、手袋まできっちりはめている。相変わらず、スポーツバッグは左肩からぶら下がっている。

昨晚、ランニングから帰ってくると、妹に捕まった仁人は夜遅くまでゲームに付き合わされた。困った事に、仁人の妹にはゲームを飽きるか寝てしまうかするまで止めないという絶対にネットゲーム

をやらせてはいけない癖がある。自分が眠くなって寝ると止めるのに、仁人が眠くなって寝ると叩き起こしてくるのだからたちが悪い。「ふわ」

「お前があくびってことは妹ちゃんにでも捕まったか」

「ああ、一時間目の現国は睡眠学習決定だ」

坂の途中で合流した黒松が苦笑いを浮かべる。強い風が吹いたので、二人して寒そうに身を縮みこめる。

「さっさと行こうぜ」

「だな」

二人は少し早足になりながら、温かいであろう教室を目指して長い坂道を登っていく。仁人は黒松を校門のところで待たせて、自分は駐輪場に自転車を置いてくる。その後、並んで校舎へと入って行き、黒松の教室の前で別れる。仁人は一人、自分の教室へと向かい、その扉を開ける。

「おう、遅かった」

開けた瞬間、閉めた。仁人は見てはいけないものを見てしまったような気がした。あまりの寝不足で幻想が見えたのかと思うくらいだ。真相を確かめるため、今度はそつと扉を開いて、隙間から教室の様子を伺う。

「俺がこんな時間にいたら怪奇現象か？」

隙間から貴士が同じように覗いていた。仁人と目が合う。じつとお互いを見つめあうこと数瞬、仁人が先に視線を逸らして、疲れ眼などの時にするように眼球を瞼の上から揉み解す。

「こんな夢を見てしまうほど寝不足なのか」

「どこまでも認めないつもりか」

「待てよ。まさか」

仁人はさつと腕時計で時間を確認する。ホームルームの予鈴まではまだ余裕がある時間だ。

「もうなんでも構わんから、さっさと入って来い」

「ああ」

貴士が開けた扉をくぐり、教室へと入って自分の席に着く。スポーツバッグを左肩から下ろして、必要な教科書類を机の中に仕舞っていく。

「よう、おはよう」

そこでようやくずっと隣で立っていた貴士に今、気付いたかのようになぞする。

「そこまでして俺がお前より早く教室にいたことを認めたくないか？」

「認めたくないとかじゃない。ありえない事実だ」

「せっかく俺が頑張ったってのに」

「お前が頑張ったときは必ず良からぬことを考えている時だ」

「ま、否定はしない」

貴士は悪びれるわけでもなく、逆にドヤ顔をしそうな勢いである。
「で、どうした？」

眠気がまた襲ってきた仁人はさっさと貴士との会話を終わらせてしまっ、安住の地へと赴きたかった。欠伸をかみ殺しつつ、投げやり気味に先を促す。

「ああ、土曜日のことだが」

「映画じゃなかったのか？」

「映画ってことで、綾瀬たちと一緒にになった」

「なんだ、そんなことか……ん？」

貴士がどこまでも何気なく言うものだから、たいしたことじゃないと聞き流しかける。どこか違和感というか疑問を感じるが、眠気を伴った頭ではそれがどこなのか上手く判断できない。

「じゃあ、そういうことで」

「おう」

貴士は話は終わったとさっさと背を向けて歩いてく。仁人は何か引っかかりを覚えるがそれが何なのか気付けないもどかしさを感じながらも、貴士を送り出して、机にうつ伏して眠ろうとする。しかし、タイミングよくチャイムが鳴り、担任教師が教室に入ってきた。

睡眠学習で過ごした午前の授業が終了して、いつもの昼時間。黒松と貴士は弁当を持って仁人の机に集まっていた。二人が来るのに合わせて、仁人もバッグからコンビニで買ったパンを取り出す。

「今日もここで食うか？」

「それでいいだろ」

昨日同様、貴士は周りの人の許可を取らずに机や椅子を集めてくる。仁人の周りの席に気難しい人はいないので、特に無許可だからと言って何か言ってくる奴はいない。

隣の机と仁人の机をくっつけて人数分のスペースを確保して、仁人の対面に黒松、黒松と仁人の間に貴士が座る。それぞれ持っていた昼飯を机の上に広げる。

「そういや、結局、土曜はどうするんだ？映画で確定か？」

「映画で確定だ。それ以外に行くところもないしな」

「そうだな」

仁人はまだ少し眠気が残るぼんやりとした頭でメロンパンにかぶりつく。

「映画館に行くのも久しぶりだな」

「ここのところ、お互い、部活の練習とか試合で忙しかったからなあ」

貴士と黒松が他愛無い会話を続ける。仁人は眠そうに半眼で相槌も打たずに二人の話を聞き流し、とりあえずパンを齧る。今すぐにも夢の中に帰りたい。

仁人は半分ほど残っているメロンパンを片手に持ったまま器用に眠りこけてしまう。あまりの姿に貴士と黒松は面白がってそのまま放置し、教師も呆れて起こす気をなくしてしまい、結局、放課後までその体勢のまま眠り続けた。

土曜日、仁人は休みの日課にしているランニングから帰ってくる。と、熱めのシャワーで汗を流してから出かける支度を始める。服装にそこまでこだわりを持たない仁人はジーンパンにボーダー柄のインナーシャツ、上着としてダウンジャケットを着るだけである。

快晴とまではいかない天気ではあるが、雲の向こうにある太陽は眩しく、寒さは少し和らいでいる。それでも、時折吹く風は冷たく、もう冬だということを知らせてくる。

集合時間十分前には着くように家を出た仁人は予定通りに十分前に待ち合わせ場所、駅前の商店街入口の時計台に到着した。休日だから多くの人がそこを待ち合わせ場所になっている。

少し見回すと、すでに着いていた貴士と黒松がすぐに見つかる。なぜか黒松は少し不機嫌そうにそっぽ向いている。

「悪い。待たせたか」

自分が遅かったせいだと思った仁人はとりあえず黒松に謝る。

「いや、そんなに待ってない」

やはり、黒松はご機嫌斜めなのかいつもとは違い、どこか無愛想である。疑問符を浮かべながら、仁人は貴士のほうを見る。貴士はあいまいな笑みを浮かべる。

「どうやら情報の行き違いがあったようだ」

「何の話だ？」

心当たりがない仁人は次に黒松のほうを見る。黒松は不機嫌そうな顔をそのままに深くため息をつく。

「これで全員集合？」

全く状況を掴めていない仁人の後ろからどこか聞き覚えのある女の子の声が上がる。もちろん、貴士の裏声なわけがない。仁人は驚きながら振り返ると、そこには三人の少女が立っていた。その面々を見て、正確にはそのうちの一人に気づいて、仁人はフリーズしてしまう。

「あれ？ 仁人には言っていたはずだぞ」

心当たりがなさすぎる仁人は一応、記憶をたどってみるが、やは

りそんなやりとりがあつたことは思い出せない。黒松のキツイ視線に顔を横に振ることで応える。

「ちゃんと、お前が眠そうな朝に言ったじゃないか。『綾瀬たちと一緒にになった』って」

改めて三人の少女、正確にはそのうちの一人、黒髪のショートヘアをモコモコした白のベレー帽に収め、フードが付いた黒と白チエック柄のダッフルコート、三段ティアードフリルのペチパンツから生える足は黒のハイニーソックスに包まれて、茶色のアンクルブーツで足元を飾っている椎菜の姿を見る。

椎菜に見惚れそうになりつつ、仁人はあの妹に付き合わされ寝不足全開だった、貴士が珍しく先に教室にいた日のことをなんとなく思い出す。そういえば、そんなことも言っていたような気がする。「おやおや、いきなり仲違い？ せっかくこれから遊びに行こうって時に？」

茶髪とまではいかない明るめの髪をセミロングでカットし、それを左右でツインテールにしている、見たからに活発的な女の子が横から割って入ってくる。

「いや、ちょっとしたいいつものことだ」

「そ。そっちが誘ってくれたんだから、しっかり楽しませてよね」
貴士がなんてことないと答えると、納得したように少女は笑顔を浮かべる。そして、今の受け答えだけで仁人と黒松は今までの経験から状況を察する。すべては貴士が仕組んだことであると。二人して「余計なことを」と貴士を睨みつけるが、張本人はどこ吹く風のようなのである。

「ということで、しっかり楽しませてくれ」

高笑いをする貴士を尻目に、仁人はもうため息をつくしかない。

「じゃあ、なんか話がまとまったようなんで、自己紹介始めちゃうよ？」

何がそんなに楽しいのか、ハイテンションにツインテールをふわりふわりと揺らして、人懐っこい笑顔を浮かべる。その勢いに仁人

たちは若干押され気味である。今まで接したことないタイプに戸惑いを隠せない。

「私は亜樹、松木^{まつぎ} 亜樹^{あき}だよ。椎菜とは中学の頃からずっと親友なの」

「ちょ、ちよつと……亜樹」

松木は隣に立っている椎菜に飛びつき抱きつくと、頬をすりすりし始める。椎菜は迷惑そうに抵抗しながらも、顔はずっと笑顔のままである。見慣れない光景に男性陣はさらに啞然としてしまう。

「はじめまして、能登^{のど} 春香^{はるか}と申します」

隣で繰り広げられる攻防に我関せずとマイペースに、ゆったりとした口調で、能登がその長い黒髪が地面につかんほど頭を下げている。艶めくストレートの黒髪は腰に届こうするほどの長さで、髪留めなどで束縛されていないにもかかわらずまとまっている。大和撫子を地で行くような出で立ちで、和モダンをモチーフにした鞆を提げている。頭を上げると、能登は少しずれてしまった眼鏡の位置を直す。

能登の雰囲気飲まれて、ついつい仁人たちまでもが深々とお辞儀してしまう。戸惑い、啞然とし、ついには畏まってしまう。なんとか落ち着いていつものペースを取り戻そうとする。

「えっと、私は……って、あれ？なんかお疲れ？」

いつの間にか松木から開放された椎菜は少し呼吸を乱しながらも自己紹介をしようとするが、どこか疲れきった表情をしている三人を見て、不思議そうに小首を傾げる。どこかおかしいところがあつたのだろうかと思ひ返してみるも、何一つ思い当たらなかった。

「椎菜、お前のことはみんな、知っているから大丈夫だ」

「そ、そう？」

いつもの調子を取り戻した黒松が椎菜に慣れた感じで話しかける。もう何年も連れ添っているような気概を感じ取れる。

「あれあれ？なんか椎菜と親しくない？」

疑問に思った松木が黒松に下から詰め寄る。黒松は少したじろぐ。

「べ、別にそん——」

「ああ、黒松と私は幼馴染なんだ」

誰も知らなかった驚愕の事実がことも何気に告げられる。恥ずかしそうに顔を背ける黒松に対して、椎菜は特段別に意識していないように平然としている。

仁人は椎菜と黒松の意外な関係に驚きを隠しきれない。そういえば、初めて椎菜が話しかけてきた時も親しげだったことを思い出す。「つうわけで、黒松くろまつ 渉わたるだ」

未だに照れが消えて切れていない黒松がそっけなくつぶやく。微妙に頬が赤い。

「俺は紀三井寺きみいでら 貴士たかし。今回の主催者でクールで、ポップなナイスガイです」

場の空気が一瞬で凍てつく。どこをどう見てもお前はクールでもなければ、ポップなどとかけ離れているし、何をもってもナイスガイではない、と全員がツツコミたい衝動を抑える。これはきつと突っ込んだら負けだから。

仁人らが動けないでいる中、能登だけが「よろしくお願いします」と静かにお辞儀する。

凍り付いていた空気がなんとか常温になってきたところで、貴士が無言で仁人に自己紹介するよう促す。こういうのがあまり得意じゃない仁人はため息を付きながらも静かに呟く。

「宮前みやまえ 仁人きみひと。よろしく」

仁人が静かに言うのと、能登だけでなく松木や椎菜までもが「よろしく」と挨拶してくる。その対応の差に貴士と黒松は人気の差を感じないわけにはいかない。実際はそんなこと関係ないとしても。

「じゃあ、そろそろ行きますか」

ひと段落したところで、貴士が促しざろざろと雑談を交わしながら駅の改札たかぎしへと向かう。映画館はこのみつが丘にはなく、電車で二駅離れた高城市のほうにあるので、そこまでは電車移動になる。

電車で揺られる事、十数分で高城市に到着する。高城市は自然が多いみつが丘と違い、大型ショッピングモールや商店街が立ち並ぶ繁華街で、休日にもなると駅前大通りは歩行者天国になり、オーブンテラスのカフェなどが立ち並ぶ。各線乗り換えのターミナル駅でもあり、駅近くにある小山に高城^{たかじょう}という城跡や海も近いことから観光客なども多い。

目的の映画館は駅前大通りを進んだ先にあるショッピングモールに併設されている。仁人たちは駅前大通りに出る。

「ようやく着いたか」

「あいかわらず人が多いな」

先頭を歩いている貴士と黒松が久々の都会に感嘆を漏らす。

「どうもこの人ごみってのは好きになれない」

集団の最後尾を歩いていた仁人が行き交う人々を眺めながら独り言のように漏らす。その隣を歩いている椎菜も同じ感想を抱いていたので少しばかり驚きを覚える。

「実は、私も人ごみってあんまり好きじゃないんだ」

感覚を共有するような喜びで自然と顔が綻んでくるのを感じながら、椎菜も同じように独り言のように呟く。椎菜はまだそれほど話していないけど、仁人とは仲良くなれそうに気がしていた。

集団の前方、貴士と黒松はいつの間にか意気投合しており、なにやら騒がしく軽口を飛ばしあっている。黒松に使えるように能登が二歩後ろを歩いている。その最後尾を椎菜と仁人が特に何も会話することなくゆっくりと歩いていく。

大通りのオープンテラスカフェではカップルやら高校生グループが楽しい休日の午後を過ごしている。子供が親の手を引いて大通りを歩いていく。休日だというのにスーツ姿のサラリーマンが忙しそうに携帯電話で話しながら駅の方へと早足で歩いていく。

「映画の時間までまだ少しあるからどっか寄って行くか？」

腕時計で時間を確認した貴士が振り返り尋ねる。

「賛成、賛成。私、パフェが食べたい！椎菜は？」

「え？ そうだなあ……」

急に振られた椎菜は戸惑いながらも、口元に人差し指を当てながら考え始める。そのしぐさがあまりにも様になっていて、仁人は見惚れかけて途中で我に返り視線を外す。

「わたくしは餡蜜がいいです。黒松様は？」

「俺？」

「じゃあ、そこらのカフェにでも入るか。それでいいか？」

「いいんじゃないか」

一行はちょうど近くにあったオープンテラスのカフェに入っていく。せっかく晴れているので、大通りに面したテラス席を陣取る。

「いらっしやいませ」

席に座るとすぐに店員が間延びした出迎えの挨拶とともにお冷を人数分とメニューを三つ運んでくる。

大きな目のテーブルに男性側と女性側に分かれて座る。仁人はお冷をそれぞれに渡すと、メニューを男性側に一つ、女性側に二つ配る。

「ありがとね、宮前くん」

メニューを受け取った椎菜が仁人に笑顔を向ける。仁人は照れ臭くなって「ああ」と短く返事をするだけですぐにメニューに向かう。

「ねえねえ、そういえば、チケットってもう取っているの？」

「ぼっちり最高の席を用意してある」

貴士は自慢げに松木に向かって胸を張る。

「こういうことはこいつに任せておけば問題ない」

「おうよ。どんなチケットだって入手してみせるぜ？」

「え？ じゃあ、じゃあ、みらん、生天目なばためみらんのライブチケットとかも取れちゃうわけ？」

目を輝かせて、松木が貴士に詰め寄るようにテーブルに体を乗り出してくる。

「亜樹、お行儀悪いよ」

椎菜は服を引っ張って、松木を元の位置に戻らせようとする。

実際、貴土に任せておけば映画のチケットから入手困難と言われるバンドのライブチケットまでありとあらゆる情報網を使って、手に入れられないチケットはない。いったいどんな手品を使っているか、仁人も黒松も知ろうとはしないし、知りたいとも思ったことはない。

「注文は決まった？」

場がひと段落したとこで、仁人がみんなに注文の品を尋ねる。

「私は……このチョコレートパフェにする」

「じゃあ、私、このイチゴタルトのセットで。飲み物はミルクティーにしようかな」

「わたくしは、クリーム餡蜜にいたします」

「俺、コーラ」

「俺はいつもの」

「はいよ」

全員の注文を一度確認してから、仁人が店員を呼ぶと、先ほどの少しおっとりとしたウエイトレスがやって来た。仁人が全員分をまとめてオーダーする。

「かしこまりました。少々、お待ちくださいませ」

やはりどこか間延びした口調で女性店員は注文を繰り返したあと、ゆったりとカウンターのほうに歩いていった。あんなゆっくりした動きで忙しい昼飯時を凌げるのかと勝手な不安を抱く。

「そういえば、ミヤミヤとは同じクラスなのにほとんど話したことがなかったね」

「ミヤミヤ？」

仁人は怪訝な顔で松木を見るが、松木はいたって笑顔のままである。

「宮前だから、ミヤミヤ。紀三井寺君はきみいで、黒松君はクロロ」「く、クロロ……」

松木はそれぞれを指差しながら、自らが即興でつけたあだ名を呼ぶ。なんとも珍妙な名前をつけてくれたものだ。と三人とも思うが、

拒否したところで糠に五寸釘であることが松木の態度からありありと分かるので甘んじて受け取ることにする。

「亜樹はすぐに変なあだ名をつけちゃうんだよ」

「いいじゃん、そのほうが覚えやすいし。かわいいじゃん」

女の子が言う『かわいい』は範囲が広すぎて、もはやつけとけば褒め言葉になるだろうのレベルである。実際、使っている本人も何がかわいいのか理解していないだろう。

しばらくすると、注文の品が運ばれてきて、それぞれの前に置かれる。それから映画の上映時間近くまで雑談（主に貴士と亜樹による）が繰り広げられた。

ほどよい時間となったので、映画館のあるショッピングモールまでやってくる。有名ブランドやファストファッションの店が入っている。他にもゲームセンターや雑貨、家具にスーパーマーケットまであるので、ここでそろわないものはまずないだろう。

集団の先頭は貴士と黒松で、その後ろを能登、松木がついて行っている。仁人と椎菜はあいかわらず最後尾で、今は椎菜のほうが仁人の後ろを歩いている。

映画館のあるフロアは三階なのでエスカレーターを利用する。先頭の二人が先に乗り、続いて能登たちが乗る。次に、仁人が乗るはずなのに仁人はすぐには乗らない。

「どうしたの？」

「別になんでもない」

そう言いながら、椎菜を先にエスカレーターに乗せると、その後ろに続けて乗る。椎菜は仁人の行動を不可解に思いながらも聞こうと思っっているうちに、エスカレーターは目的の階に着いてしまう。

「じゃあ、ちょっとチケットもらってくるわ」

仁人たちを映画館入り口で待たせて、貴士は一人チケット売り場方に向かう。残された者たちはそれぞれ飲み物やポップコーン、パ

ンフレットなどを物色する。

椎菜がドリンクを買おうと売店の行列に並んでいると、仁人もやってくる。

「宮前くんも飲み物？」

「うん。それと、ポップコーン。貴士のだけど」

「仲いいよね、二人とも」

「伊達に長いこと付き合っていない。まあ、最初からこんな感じだったような気もするけど」

仁人は少し照れくさそうに鼻先をかく。

「ふふ、そういうの、なんかいいなあ」

椎菜は小さく笑うと、うらやましそうに仁人と貴士を見る。以心伝心というのだろうか、何も言わなくてもお互いのことがそれとなく分かる関係って憧れる。

「松木さんとすぐく仲よさそうだよ」

「うん、亜樹は私の最高の親友だよ。でも、やっぱり何か違うんだよね」

「分からない」

「そうだね。私も分からないや」

軽く笑いあっていると順番が来たので、椎菜はオレンジジュースを、仁人はコーラとメロンソーダ、ポップコーンの大を注文する。

「いいよ、俺が持つから」

二人の注文の品がひとつのトレイに乗って渡されたので、仁人はすかさず受け取る。手を出しかけていた椎菜は「そう？ありがとう」と所在なさげの手を引っ込める。

「発券してきたぜ」

それぞれ、手に飲み物やパンフレットを持って集まっていると、貴士がチケット売り場から戻ってきて、全員に座席が書かれたチケットを渡す。

「位置は真ん中よりやや前方の二列を三シートずつ。もちろん、スクリーンが真正面に来る位置取りだ」

渡された座席番号を確認する。貴士の粹な（一部には迷惑な）計らいによって、席位置は以下のようになっている。

前列に能登を真ん中にして、左右に黒松と松木。後列は椎菜の右隣に仁人、貴士の順番である。

目当ての映画が上映されるスクリーンに行くついでに開場されており、上映時間三分前となかなか危ないところだった。急いで座席につくと、仁人は貴士にポップコーンとメロンソーダを渡す。

「さんきゅな」

「あとで金払えよ」

そうして、左隣にいる椎菜にオレンジジュースが入った紙コップを渡す。

「ありがとう」

「ん」

笑顔で受け取る椎菜がかわいくて、仁人は短い返事ですぐにスクリーンのほうを向いてしまう。その横顔がどこかおかしくて、椎菜は小さく微笑む。

劇場が暗くなり、スクリーンの幕が開く。映画を盗撮しないでと、存在自体が常に盗撮してそうな奴が忠告してくると、今後公開予定の映画の予告編が流れ始める。

暗い中スクリーンのほのかな明かりに映し出される仁人の横顔を、椎菜は予告編が始まってもしばらく眺めていた。

映画本編が始まって一時間ほど経った。サイエンスフィクションであったはずが、だんだんとホラー的要素が増え始めてきていた。洋画でよくある急に飛び出てきたりするパニック系ホラーである。

椎菜は映画をあまり見るほうではない。特に、こういうパニック系ホラー映画は。

「ひっ!？」

左から小さな悲鳴が聞こえたように思った仁人は横目でそちらを

見てみると、椎菜が大きな目を硬くつぶって、顔をそむけている。スクリーンではちょうど新手的エイリアンらしきモノが襲い掛かってきたところである。

こういうのにまったく慣れていない椎菜は常人にしてみれば、怖くもないちよつと驚くようなシーンでも恐怖を感じてしまう。恐怖を耐えるために手を硬く握る。その手が小刻みに震えていることにも気づけないほど、椎菜はもう限界だった。でも、見ないとあとで皆と話せないと思い、がんばってスクリーンに目を向けようとするが、見たときに限ってモンスターが飛び出してくるので、なかなかスクリーンのほうを向けない。

「ひゃっ!？」

スクリーンを見ていないのに悲鳴が出てしまった。握っていた右手の甲に何かが触れたからである。

「大丈夫」

他の人には聞こえないように配慮した、けれどしつかりとした静かな声が右側から聞こえてくる。振り向くと、仁人がにっこりと微笑んでいた。

椎菜の震えていた小さな右手は今、仁人の左手に包まれている。大きくて、ごつごつしている決して綺麗とは言えない手。けど、確かな温かみを持った手に包まれている。

そのことに気づいた椎菜は不思議と怖いという感情が消えていた。確かに、スクリーンに突如現れる怪物にはびっくりするけど、怖いとは思わなくなっていた。

そっと仁人の横顔をのぞき見ると、少しこわばった表情を浮かべながらも真剣な眼差しでスクリーンに集中している。スクリーンの光の加減かもしれないが、仁人の頬が少し赤くなっているように見えなくもない。スクリーンに集中しているはずの眼が時折、こちらを気にしている風であるような気がしなくもない。その様子が少しかわいくて、優しく、かっこよくて、頼りになって、椎菜は小さく笑ってしまう。

ああ、そういうことか……

椎菜は心の奥で何かを納得する。そうして、そっと指を絡める。視線はスクリーンのほうに向けたまま。

ハッピーエンドというありがちな結末を迎えた映画はスタッフロールがスクリーンに流れている。黒をバックにした白文字が次々と下から上へと昇っていく。

もう椎菜の右手は自由になっている。名残惜しい温もりと汗を少しだけ残して。その残っている感覚を思い出すようにそっと撫でみる。やはり、自分で触れるのとは違うことを改めて実感する。

スタッフロールも終わり、最後に配給会社のロゴが映し出されて映画は終わる。スクリーンの幕が閉じて、次第に明るくなっていく。明るくなるにつれて、雑音も増えていく。

「さあ、終わった、終わった」

「うーん、ちょっと退屈だったなあ」

貴士が立ち上がったのを皮切りに、仁人たちも退場していく客の流れに乗って同じように退場していく。

他の客に流されるように映画館の出入り口にまでやってくる。

「さて、これからどうするかね」

「せっかくだから、今の映画の品評会しようよ」

「それを言うなら、評論会ですね」

能登が松木に冷静なツツコミをいれる。

「いいじゃん、別にどっちでも。私的にはもうちょっとアクションがあってもいいかなあって思うなあ。てか、途中のモンスターがアホすぎるでしょ」

松木が笑いながら自分の感想を我先にと話し出す。

椎菜はやばい流れになったなあと内心で冷や汗を流す。結末こそ見たけど、映画の中盤、モンスターたちが現れだした頃からあまりスクリーンに集中できていない。というか、見ていない。どうやっ

て切り抜けたものかと焦っていると、

「悪い。途中寝ていたからあんまり見てないんだ」

仁人がすまなさそうな顔をしながら謝ってくる。

「ミヤミヤ、もったいないなあ」

「また妹にでも捕まったか？」

照れ笑いを浮かべる仁人を皆が和やかな笑いでからかう。椎菜ひとりには驚きを隠せないでいた。椎菜は仁人が片時もスクリーンから視線を外さず、集中していたことを知っている。決して眠っていた様子はない。それは隣にいた貴士も分かっているはずなのに、貴士も一緒になって仁人をからかっているの、椎菜は自分が間違っているのかと思えてくる。

「じゃあ、ミヤミヤは次までにもう一回見ておくこと」

「レンタルが出るまで待ってくれ」

椎菜が混乱していると、仁人は皆に分からないように椎菜にだけ小さく微笑みかける。実際には、椎菜のほうを偶然見ただけかもしれないが、椎菜にはそう映った。

「じゃあ、どうするね？」

「適当にそのへん、廻れば何かあるだろ」

黒松がぶっきらぼうに言うのと適当に歩き出したので、皆もそれについてぞろぞろ移動を開始する。一難去ったことに一息つく椎菜は能登の隣を歩きながらも後ろを歩く仁人が気にかかっていた。

なぜかは分らない。でも、なんだか気にかかっている。いいように勘違いして、自意識過剰になっているだけかもしれない。純粹な優しさなのかもしれないのに。私は……

「まだ確定事項ってわけじゃないよね……」

椎菜の独り言は隣の能登にも届くことなく、雑多な音の渦に飲み込まれていく。

休日ということもあり、家族連れからカップル、中高生グループ

に老夫婦まで、実にさまざまな人々が行き交い、それぞれの時間を楽しんでいる。

仁人たちは適当にショップを巡り、インテリアの店ではそれぞれに似合うアイテムを選んだり、アパレルショップでは女性陣によるプチファッションショーが執り行われたり、男だけではすることもないようなことをしていく。

「やっぱり、女の子がいると華やかで楽しいね」

「そう？そう？私たちもきみたちが楽しませてくれるから面白いよ」

やたら楽しそうに明るい笑い声を上げる松木はバシバシと貴士の背中を叩く。いつの間にやら完全に意気投合してしまっている。なにやら危険な二人が近付いたように仁人はどことなく感じる。

「先ほどはぬいぐるみを取っていただき、ありがとうございます」

「ああ、あれくらい構わないよ」

クレインゲームの小さなぬいぐるみを抱えた能登が深々と頭を下げるので、黒松は素っ気無くそっぽを向く。照れ隠しであるのがあるやうに分かる。

「あれ？能登さん、鞆は？」

「はい？あら、いつの間にか鞆がなくなってます」

朝の時点で持っていたはずの和モダンな鞆が能登の手元からなくなっている。仁人から指摘を受けて、ようやくその事実気付いた能登は辺りを見回して、ゆっくりとした口調で驚く。

全員で辺りを搜索してみるが、どこかに置き忘れてきたようで見当たらない。

「ないね。どうしようか」

「ハルル、どこからないか覚えている？」

「すみません、残念ながら覚えていません」

能登はすまなさそうな表情を浮かべて首を横に振る。

「貴士」

「ダメだ。映画館に問い合わせてみたが、そういった忘れ物はない

ようだ」

仁人の呼びかけに肩すくめて答える。全体に沈んだ空気が流れる。
「安心しろ、俺たちが見つけてやるから」

完全に落ち込んでしまっている能登の頭に手を置いて、黒松がまだ照れが残っているながらも励まそうとする。

その様子を見た仁人と貴士はお互いに頷きあい、なにやら企む。

「じゃあ、みんなで手分けして探すか。お互いの連絡先はもう交換しているよな？」

「さっきの喫茶店で済ましてるよ」

松木が先生の質問に答える生徒のように手を挙げながら答える。

「うし。では、これより宝探しゲームの開始だ。ターゲットは能登の鞆。見つけた人には豪華特典を進呈。発見したら携帯で連絡すること」

貴士が実に楽しそうにゲームのルールを説明する。突然のことに呆気にとられる椎菜と能登だが、松木はすでにやる気マンマンである。

「レッツ、パーティータイム！」

「おーっ！！椎菜、行こう」

「えっ？ええっ？」

松木は状況が今ひとつ飲み込めていない椎菜の手を引いて、一気にどこかへと走り出す。呆れながらも、黒松も同じようにどこかへと歩き出す。

「黒松」

「ん？」

仁人に呼び止められて、数歩進んでいた黒松は立ち止まり振り返る。仁人は未だに呆気にとられている能登の背中をそっと押し出す。能登はたたらを踏みながら黒松に近付く。

「っと、危ない」

能登がつまずいてこけそうになったので黒松は肩を抱いて助ける。
「能登さんは鞆がないんだから、携帯もないだろ？一人じゃ連絡が

取れないから一緒に連れて行ってやれ」

そう言って、仁人は黒松たちに背を向けて別の方向に歩き始める。すでに肩から手を離れた黒松は「やれやれ」とため息をついてから、隣に立つ能登の顔を見る。能登は不安と申し訳なさが入り混じったような瞳で黒松を見つめている。

「行くか」

「はい」

黒松と能登は隣り合って歩き出す。数十分後、二人はゲームセンターに忘れられていた鞆を発見する。

無事、能登の鞆も見つかってから集合しなおすと、いい時間になっていたのでそのまま帰るため駅へと向かう。陽が沈むのが早くなっているため、外はすでに薄暗くなっていた。

「暗くなると、いっそう寒くなるな」

「なんだかんだで、もう冬か」

澄んだ空気が冷たい風とともに運ばれてくる。気温の下がったこの時間だと、オープンテラス席も撤去されている。行きと同じ道を歩いているのに、どこか違う印象を受ける。すでに歩行者天国は解消されており、人気も減っている。

やはり先頭は貴士で、その隣を仁人が歩いている。最後尾で女の子三人が今日の話を話しあっている。

「今日はすごく楽しかったね」

「そうだね」

「はい。でも、黒松様には迷惑をかけてしまいました」

能登が申し訳なさそうだが、どことなく嬉しそうに表情を弛める。「あはは、あれはあれで楽しかったからいいじゃん。鞆もちゃんと見つかったんだし」

松木が明るく笑い飛ばす。

「そうだよ。最初は何が起こったのか分からなかったけど、ああい

うトラブルも遊びにしちゃうなんてすごいよね」

「ホント、どうかしてるよね」

今日最後のイベントを思い出して、笑い声を上げる。

能登も小さく口を押さえながら控えめに笑う。決して積極的ではなかったけど、必死になって探してくれた黒松の姿を思い出して、嬉しさと温かさを覚えて、さらに優しく微笑む。

駅まで半分ほど来たところで、椎菜の歩く速度が遅くなる。慣れないヒールなど履いて走り回ったから、疲れが溜まってきている。少しずつ集団から遅れていき、だんだん距離が開いてくる。

椎菜もがんばって追いつこうとするが、脚は言う事を聞いてくれない。声をかけようにも何か恥ずかしいような気がして、なかなか言葉が出てこない。

「仕方ないよね」

小さく呟いて諦めかけたとき、仁人がふいに後ろを向き、椎菜が少し遅れていることに気が付く。駆け足で近付いてくる仁人に椎菜はどんな表情をすればいいのか困る。

「どうかした？」

「なんでもないよ」

とりあえずの愛想笑いを浮かべてみるが、上手くできている自信はない。仁人は椎菜の態度に少し違和感を覚える。

「そう」

本人が何も言わないなら無理に聞かない方がいいと、仁人はとりあえず椎菜の隣を歩く。少しでも近くにいたいと思う下心がないと言えは嘘になるが、純粋に椎菜のことが心配になったからだ。

しばらくお互いに黙ったまま歩き続ける。時折、風に乗って漂ってくる椎菜のシトラス系の香りが仁人の鼻腔をくすぐる。そのたびに今日、何度目か分からない不整脈が起こる。

そうしていると、椎菜が少しずつ歩くのが遅れていくのを感じ取り、仁人も歩幅を少しだけ縮めて椎菜の速度にあわせる。貴士たちと離れていくが、今はこうして椎菜と一緒に歩いていたと思う。

それくらいは許されるだろうと誰に対してか分からない言い訳しながら。

椎菜はちょっとした驚きと嬉しさを覚えていた。仁人が少し遅れていたことに気付いてくれただけでなく、何も言わずに心配するように隣を歩いてくれて歩くスピードまで合わせてくれている。ちょっとしたこともかもしれないけど、どこか守られているような気がする。

そういえば、と椎菜は思い出す。仁人が今日一日、ずっとこういう小さな気遣い、気付かれないような些細な優しさで溢れていたことを。エスカレーターや階段では必ず下にいたし、隣を歩いている時も速度を今のようにあわせてくれていた。能登の鞆だって、一番に気付いたのは仁人である。

やっぱり、そうなんだ。この人はこういう人なんだ。誰にでも優しい。私に対してだけじゃなく、誰に対しても優しく、気配りができるんだろう。

風にさらされて冷たくなっているけど、未だに右手の甲に触れると、温かさが残っているみたいに感じられる。寒いはずなのに、体はどことなく温かいようにも思える。隣を歩いているのがだんだん気恥ずかしくなってくる。

「あれ？ 仁人ゝなに、ちんたら歩いているんだよ」

「ああ、悪い。先に行ってくれて構わない」

街灯に照らし出されたその横顔を見ると、顔が温かくなるどころか熱くなってくる。赤くなっているのがばれないように少し俯き加減になってしまう。

「スイッチ、入っちゃったかも……」

「ん？ 何か言った？」

「ううん、なんでもない。さ、行こう」

椎菜は仁人に最高の笑顔を向けると、その腕を取って走り出す。仁人も戸惑いながらも引かれるがままに走り出す。

陽が沈んでいるのに電気もつけていないため暗い部屋。怪しくパソコンのモニターだけがぼんやりと灯りを灯している。

「ほう、綾瀬椎菜か。図書館長をしており、生徒、教師の両方からも人気が高いと」

薄暗い部屋にいる男は画面を見て、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべる。長方形をしたメガネが怪しく光りを反射する。

モニターには椎菜のプロフィールが顔写真とともに映し出されている。そこには、学年やクラス、役職といった簡単なものだけでなく、成績や住所、周りの評判などのディープな個人情報まで記されている。

「この女、なかなか使えそうじゃないか」

男はふたたび不気味に笑う。

第二章

期末試験が目前にまで迫った木曜日。テスト前最後の練習試合が日曜に迫っているので、仁人的には試験などよりもその試合のほうが気にかかる。

本格的に冬となったにもかかわらず、放課後の体育館は熱気に包まれていた。

仁人の指導の元、部員が一丸となって練習に励んでいる。本来仕切るはずのキャプテンすら仁人を頼りにしているのだから、実質仁人がキャプテンみたいなものかもしれない。

「遅い！今のはもっと早く切り込んだほうがいい。パスが通らなくても、その分どこかにスペースが生まれる」

珍しい仁人の厳しい叫び声がコートに木霊する。センターの羽多野^{はた}裕人は膝に手について肩で息を切らしながら仁人の指摘に耳を

傾ける。

「もう一丁、言っとく？」

ボールを持ったポイントガード、貴士が羽多野に尋ねる。

「うっし、もう一本！」

羽多野は気合の入った掛け声を上げて、セットプレイのポジションに戻る。

「じゃあ、ラストだ」

右斜め四十五度のシューターの位置についた仁人が指を一本掲げる。部員全員の声が体育館全体に響き渡る。実戦を想定したセットプレイの練習を再開する。

最後に仁人のスリーポイントシュートが綺麗にゴールネットを揺らして、本日の練習が終了する。これ以降は自主練習に切り替わる。

「お疲れさん」

「ふう、ああ、お疲れ」

体育館の壁にもたれかかって座っていた仁人のところに貴士がスपोर्टドリンクを二本持ってやってくる。一本を仁人に手渡して、貴士も同じように座る。

「どうだ、勝てそうか？」

「勝てそうじゃない……勝つんだ」

受け取ったペットボトルを無言で半分ほどまで一気に飲み干す。

「一月には新人大会が控えている。休んでいる暇はないよ」

「そうだな。こないだの映画が今年最後だったかもな」

仁人はつい数日前のことを思い出すと、少し恥ずかしくなってしまう。いくら暗がりでも受け入れてくれたからとはいえ、あれは大胆すぎたのではないかと今でも考えてしまう。

左の手のひらを眺めて、その時の感触を、強張っていたけど柔らかく温かかった感触を思い出す。動いた後だとしてもやたらと早い心臓の動きを静めようとするが、なかなか上手くないかない。

「ああ、会長がなにやら企んでいるらしいぜ」

「シュート練習してくる」

仁人は貴士の話を聞かずに、傍らに置いてあったボールを持って立ち上がると、早々ゴールのほうへと歩いていく。

動いていれば、バスケットをしていけば、集中して他の事を考えずにいられる。この想いもきつと忘れられる。今の僕には資格がないのだから。

期末試験開始一週間前、星鈴高校ではテストが終わるまで一切の部活動が禁止される。仁人にとっては苦痛にも思える期間が明日から始まる。おかげで、練習試合に勝ったにもかかわらず、仁人は朝から憂鬱な気分で坂を登っている。

「よう、元気ないな。そうか、明日から試験発表か」

後ろから追いついた黒松が仁人の肩を叩く。

「おはよ」

左肩から少しずり落ちたスポーツバッグを直しながら、黒松に挨拶する。

「おはようございます」

「え？」

突然、黒松の後ろから丁寧な挨拶されたので驚いて振り向くと、能登が深々と頭を下げていた。どういうことだと疑問に思いながら、黒松の顔を見ると、どこか困惑しているような表情を浮かべている。

「まあ、ついさっき、そこで会ったんだ。三日連続」

「そりゃあ、まあ」

仁人はなんと云えばいいのか分からず曖昧に答える。能登はきつちりと黒松の二歩後ろを歩いていく。

そのまま、なんとも奇妙な三人で校門まで一緒に行き、仁人は自転車置きに行くため、いったん二人と別れる。

教室に入ると、すでに幾人かはテスト勉強を始めており、試験ムードが漂い始めている。仁人はため息を吐いてから席に着く。

「どうしたんだい、ミヤミヤ。そんな辛気臭いため息なんかついち

やってさ」

「おはよ、松木さん」

朝からハイテンションな松木が偶然通りかかり話しかけてくる。

「おはよう！元気がない君にこれをあげよう」

そう言って、松木は仁人の机に紙の束を置いて、ツインテールを揺らしながらどこかへと去っていく。仁人はそれを持ち上げて何かを確認してみる。

「生徒会提出書類？」

それは生徒会に提出しないといけない同好会の活動申請書類だった。しかも、提出期限が今日となっている。

「え？ちよっと、松木さ……ん……」

その事実気付いた仁人はすぐに松木を呼び止めようとするが、すでに松木の姿は影一つなかった。

「まあ、別に生徒会に提出するくらいやってあげるか」

仁人は以前に何回か生徒会に部活関係の書類を出したことがあったので、要領なら分かっている。別にたいした手間でもないの代わりに生徒会室、通称「御殿」に行くことにする。

「あれ？仁人くん、どこに行くの？」

御殿に向かう途中の廊下で椎菜とばったり出会う。あまりにも不意打ちだったので、仁人は戸惑ってしまいが、なんとかそれを隠そうと平静を保とうとする。

「お、おはよ。ちよっと御殿まで。松木さんに渡されてね」

手に持っていた紙束を掲げて椎菜に見せる。

「もう、亜樹ったら。ごめんね」

「別に構わないよ、これくらい」

ため息をつく椎菜に仁人は多少こわばっている笑顔を浮かべる。

「私も図書館に用事があるから途中まで一緒に行こっか」

椎菜は人懐っこい無垢な笑顔を輝かせると、そのまま仁人の隣を歩きはじめる。仁人の焦りはさらに加速される。

教室棟から出て、学校のシンボルである図書館の隣にある二階建

ての建物、御殿の前までやってくる。

「じゃあ、私は図書館に用事があるから」

「図書館長の仕事か。がんばって」

「うん」

椎菜は見るものすべてを魅了するような笑顔で手を振ってから、駆け足で図書館に入っていく。今にも飛び跳ねそうな勢いであった。「さっさと済ませないと」

腕時計を確認すると、朝のホームルームまでそれほど時間が残っていない。生徒会室に誰か役員が居ることを祈りながら、仁人は御殿の仰々しい扉を開ける。

御殿の中はさながら中世貴族の屋敷の一角みtaiである。扉を開けると目の前に二階へと続く巨大な階段が飛び込んでくる。一階部分は資料などを保管しておく倉庫となっており、生徒会役員はたいてい二階部分に居ることが多い。

仁人はゆっくりと広い踊り場がある階段を昇って、二階奥にある本当の意味での生徒会室のドアをノックする。

「はい、どうぞ」

中から他を圧倒するような力強い声が聞こえてくる。仁人は多少びびりながらそのドアをあける。

「失礼します」

仁人は恭しく扉をくぐり中へと入っていく。

部屋の中央に大きなテーブルが我が物顔で居座っており、その上座に社長机とも呼ぶべき重厚なデスクが備え付けられている。その端っこにパソコンモニターが置かれている。

「何の用だい？」

社長机の前に座ってモニターに向かって作業していた男、星鈴高むすた 校生徒会長、六十谷みつよし 光義が視線を訪問者に向ける。

知的な長方形型メガネと整った精悍な顔からは想像も付かない屈

強な体つきをしている。座っている状態では分らないが、身長は百八十前半である。引き締まっているためそれ以上の印象を与える。太い枝のような左腕には生徒会を示す腕章が巻かれている。

「ああ、はい。これの提出を頼まれたので」

仁人は生徒会長席まで近づき、書類を手渡しする。光義も立ち上がってそれを受け取る。光義は簡単に書類を確認すると、また再び席に戻り再度不備がないかチェックする。その間、仁人はその場に立ち尽くして待つ。

「うん、問題ないようだね。確かに受け取ったよ」

チェックし終わった書類を机の上に放り投げ、光義はまた先ほどの作業に戻る。仁人は黙ってその場を離れる。

「失礼しました」

完全に棒読みの辞令の句を読み上げて、仁人は生徒会室を後にする。部屋からはキーボードを叩く音だけが聞こえた。

仁人が教室に戻ってきたときにはすでにホームルームが始まる直前だったにも関わらず、貴士が仁人の元にやってくる。片手にはまだ鞆を持っており、登校直後であることが伺える。

「どこ、行ってたんだ？」

「お前の天敵のところ」

「生徒会室？」

貴士は苦虫でも食いちぎったような顔をする。

どこことなく破天荒で、無茶をしてよく問題を起こす貴士は生徒会から要注意人物認定を受けている。特に生徒会長の光義とは反りが合わないらしく、一方的に敵視している。

「なんだって、そんなどこへ？」

「用事があったんだから仕方ないだろ」

「あの会長様がなにやら――」

貴士が何か言おうとしている途中でチャイムが鳴り、担任が入っ

てきたので強制終了させられる。

仁人は担任の話を右から左に通り返けさせながらぼんやりと窓の外を眺める。どんよりとした重い雲が空一帯を覆い隠している。どうにも雲行きが怪しく、夕方くらいから雨が降りそうな天気である。

テスト前ということもあり、引き締まった空気が流れつづけた授業もようやく五つ目の科目が終了する。放課後になっても開放されたような感じはなく、どこかまだ少し緊張が残っている。

仁人は試験前最後の部活に精を出すために温存していた体力を持て余さんと気合十分、やる気満々で体育館に向かおうとする。

「ああ、悪い。ちよっと、これを図書館に返しといてくれ」

「またか」

スポーツバッグを左肩に担げたところに、貴士が近づいてきて数冊の本を鞆から取り出し手渡してくる。仁人はため息をつきながらもそれを受け取る。

「俺はちよっと別の用事があるんで、頼んだ。部活の時間には間に合うようにする」

「早く来いよ」

走り去っていく貴士の後ろ姿を適当に眺めながら、手元の本のタイトルを見てみる。相も変わらずよく分からない本ばかりであった。教室棟から渡り廊下に出ると、湿気を含んだ生暖かい風に吹かれる。空は今にも雨粒を落とさんと待ち構えている。その天に喧嘩を売らんとばかりそびえる図書館の大時計はもう部活開始まであまり時間がないことを示している。

「ちよっと急ぐか」

仁人は足早に図書館に向かい、中に入ると前回みたいになり立ち尽くすことなく、返却カウンターへと近づく。

「これ、返却お願いします」

「はい、わかりました……って、仁人くんじゃない」

カウンターのの中にいた椎菜は優しく仁人に微笑んでくる。

「また貴士に頼まれて」

「そうなんだ。仁人くんも大変ね」

椎菜は仁人から本を受け取ると、慣れた手つきで話しながら返却作業を進めていく。

「はい、終了。仁人くんはこれから部活？」

「ああ」

「そうなんだ、がんばってね」

「ありがとう」

椎菜の女神も裸足で逃げ出しかねないスマイルに仁人はまた心拍を一回忘れてしまう。そのことを悟られまいと、頬が赤くなっている顔を背けてしまう。

「私はこれから御殿に行かないといけないんだ」

「御殿に？」

椎菜が少し嫌そうにつぶやくので仁人もなんとなく気になってしまった。

「そ、御殿に。なんか打ち合わせがあるんだって、よく分からないけど」

「綾瀬さんも大変だね」

「これも館長の務めだと思ったら、どうってことないよ」

椎菜はちよつと誇らしげに笑顔を浮かべる。仁人はそう思える椎菜を、図書館長という役職を羨ましく思う。自分も同じように思えるだろうか。

「てなわけで、ちょっと行ってくる」

椎菜はカウンターの内側から出てくると、その足でそのまま図書館の出口のほうへと歩いていく。仁人はその後ろ姿に何か言葉をかけようと思うが、結局何も言えないうちに椎菜は図書館から出て行ってしまった。

「あっ、俺も急がないと」

腕時計で時間を確認すると、部活が始まる時間がかなり迫っている。

た。仁人は左肩のスポーツバッグをかけなおすと、駆け足で体育館へと急ぐ。

空が黒く厚い雲に覆い隠されている。まだ日が昇っている時間だというのに、辺りは暗くどんよりとしている。椎菜は図書館から出た時から嫌だなあっと感じていた。それは天気のことなのか、これからのことなのか。

椎菜は御殿の観音開き扉をゆっくりと開く。中から少し埃っぽい空気が流れ出てくる。中央の大階段を昇って、二階奥の部屋に向かう。何度か来ているが、どうにもあまり好きになれないでいた。

「失礼します」

ドアを数回ノックしてから、ゆっくりと開いて顔だけを先に入れる。役員たちが座る大テーブルには誰もいなく、部屋ががらんとしている。巨大な執務机に一人の長身の男がハイバックチェアに身を沈めているだけである。

「何の用だい？」

生徒会長、光義は手を休めて、パソコンモニターに向けていた視線を開いたドアのほうに移動させる。椎菜の姿を認めると、優しく微笑みかける。

「ああ、図書館長さんか。すまない、呼び出したりしてしまって」

「いえ、別に構わないです。これも仕事ですから」

椎菜は少し緊張した面持ちできつちりとした丁寧な言葉遣いを心がける。普段とは違う図書館長としての顔で生徒会長に対する。

「そう畏まらないで。立ち話もなんだ、さあ、ここに座ってくれ」

光義は立ち上がると、近くの椅子を引き椎菜に勧める。光義の整った顔が柔和な笑みを浮かべる。椎菜は勧められるがままにその椅子に座る。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

椎菜が座ってから、光義は座らずに窓近くの戸棚に近づく。パソコンのモニターに何が映っているのか、椎菜の位置からでは窺い知れない。

「用件は何でしょうか？」

「まあ、まずはお茶でもどうだい？紅茶と緑茶、コーヒーもあるけど、何がいい？」

光義は高そうなアンティークのティーカップとソーサーを用意して、お茶の準備を始める。戸棚の中にはさまざまな種類の紅茶の葉やコーヒー豆、お茶菓子が貯蔵されている。

「ミルクティーをお願いします」

「ちよつと待っててくれ」

光義はルフナの葉を取り出して、まずはストレートティーを淹れる。香り高い湯気を立てながら、カップに注がれる滴ひとつひとつが輝いている。カップを半分ほど満たしたところで、少量のミルクを注ぐ。深い紅色した水面に少しずつ白色が渦を巻いて混ざっていく。スプーンで軽くかき混ぜると、すぐに薄いダークサーモン色へ変化していく。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

光義はそつと陶磁器のカップをテーブルに置く。椎菜は小さく頭を下げてお礼を言ってからカップの端に唇をつける。ルフナ独特の香りと味わいが、ミルクが加わったことによってより繊細でマイルドになっており、溶けるように口の中に入ってくる。上品な甘みと爽やかな香りが口の中に広がっていく。椎菜が今まで飲んできたミルクティーの中で一番おいしい。

「どうだい？」

「大変おいしいです」

光義は少し自慢げに感想を求めると、椎菜は感動したとばかりに瞳を輝かせる。そんな椎菜の横顔を眺めながら、光義は小さく微笑む。

「それはよかった」

光義は自分の分のカップを持って、席に戻り紅茶の香りを愉しむ。十分に香ってから、そっとカップに口をつける。

「ルフナはストレートで飲むと濃厚なコクでとても独特なんだ。それが、ミルクティーにすると相性が最高にいいから極上の一品になってくれる」

「そうなんですか」

椎菜は光義の解説を聞きながら、揺らめく水面に視線を落として思いを馳せる。また飲んでみたいな、とルフナという名を記憶に留めておく。

「気に入ってもらえたようで何よりだ。飲みたくなったら、いつでも来てくれて構わない。君なら大歓迎さ」

「ありがとうございます」

お礼を言ってから、また一口、口に含む。何度味わっても、やはり絶品であった。

「そういえば、他の役員の方々は？」

ミルクティーをカップの三分の二ほど飲んでから、椎菜は入った時から疑問に思っていたことを光義に尋ねる。

「この時期はいろいろと忙しいんですね。ちよっと出払っているんですよ」

「そうなんですか」

光義は苦笑を浮かべて、困ったという表情を見せる。

「実は、図書館と生徒会でちよっとしたイベントをしようかと思っている」

「イベント、ですか」

「イベントといってもたいしたものじゃない。試験が終わってしまふと、冬休みが始まるまで生徒たちはどうも授業に身が入らない。まあ、仕方ないことだとは思うけどね。そこで、生徒会と図書館が協力してだね、何かやりたいと思うんだ」

光義は顔の前で指を組み、少し考えるような仕草を見せる。

「そこで、図書館長の君に何かいいアイディアがないかと思って、今日は来てもらったんだ」

「そうですね……」

椎菜は口元に人差し指を当てて、天を仰ぐように思案してみる。テストが終わってからでも勉強に励んでもらえるような企画となるとなかなか難しい。しばらく二人して黙々と名案を探る。

しばらく悩むもなかなかいい案が思い浮かばない。カップに残っているミルクティーもすっかり冷めてしまっている。

「やはり、そう簡単には出てこないね。すまない、せっかく来てもらったのに」

「いえ、こちらこそ力になれず申し訳ないです」

椎菜はすぐく残念がった表情で光義に頭を下げる。

「まだ少し時間はあるからゆっくり考えようじゃないか」

「そうですね」

「そこで、だ。大変恐縮ではあるが、明日からたまに生徒会室に来てもらえないだろうか？ 打ち合わせとかをしたい。試験勉強で忙しいだろうが、お願いできるかな？」

光義が精悍な顔を優しく緩めながらも、真摯な思いが伝わってくる真剣な表情で椎菜を見つめるので、椎菜は少し照れてしまい視線を逸らしかけるが、自分も真剣に応えなければと思いとどまる。

「分かりました。私でよければ協力させていただきます」

「ありがとう。助かるよ」

協力を取り付けられたからか、はたまた別の思いがあつてなのか、椎菜には見えないように光義はニヤリと小さく笑みをこぼす。

日が短い冬場だろうが、日が長い夏場であろうが、バスケット部の部員が帰る頃には空に星が輝いている。違うのは輝いている星くらいだろう。今は雲がその星々を隠している。

仁人は火照った身体を夜風で冷ます。といっても、冷ますには少

々冷たすぎるが。

「日に日に寒くなっていく」

「そんなに寒いのが苦手だったか？」

「寒いのは嫌いじゃないが、冬が好きじゃない」

「変な奴だ」

「お前にだけは言われたくなかった」

仁人と貴士は並んで校門近くの駐輪場に歩いていく。仁人が自転車を取りに行っている間、貴士は校門で待っている。

「まだやってるのか」

自転車を取り出し、ふと図書館を見ると、まだ明かりが点いている。終了時間が遅いことで有名なバスケット部より遅いなんて、いったい何時に終わるのだろうか。なんとなく椎菜のことが心配になった仁人はしばらく図書館を眺めていると、電気がすべて消えたので終わったようである。

「図書館も大変だな」

小さくつぶやいた仁人は急いで待ちくたびれているであろう貴士の元へ向かう。スポーツバッグが左肩から落ちかけたので、慌てて直して自転車に飛び乗る。

校門には誰も居なかった。

「あれ？」

貴士がいつも寄りかかっている場所はみごとに窒素と酸素と二酸化炭素と微量のガス、つまり空気しかない。右を見ても、左を見ても、貴士らしき人影も確認できない。トイレにでも行ったのかとしばらく待ってみるが、現れる気配がまるでしない。

「先に帰ったか？」

思った以上に待たせてしまい、先に帰ってしまったのかと思った仁人は携帯電話を取り出して、貴士からメールが来ていないかチェックしてみる。しかし、着信は一件もなかった。

「どうするかな」

「何が？」

帰ったものか、待っているべきか、途方に暮れている仁人に突然、誰かが話しかけてきたので、仁人は驚いて振り返る。

「綾瀬さん!？」

そこにはサイドポニーを解いている椎菜が疑問符を浮かべたような表情で立っていた。

「仁人くんも今、帰り？」

「ああ、そのはずだったんだけど……」

「はずだった？」

椎菜が人懐っこい笑顔を浮かべながら小首を傾げる。

「貴士と一緒に帰るんだったんだが、消えた」

「携帯に電話した？」

「出ない」

「メールは？」

「送ったが、返信がこな——来た」

仁人は握っていた携帯をすばやく開くと、着信したばかりのメールを確認する。期待通り貴士からだ。

『すまん、急用ができた。先に行く』

絵文字もない用件だけを伝える簡素なメールは貴士の特徴である。仁人も似たような感じである。

「うわー、絵文字もない」

しかし、装飾することが大好きな今時の女子高生である椎菜にはそれは信じられないようなメールであったようで、脇から覗きこんで驚きを隠せないでいる。仁人はそんな椎菜に驚きそうになる。

「ま、なんにしても先に帰ったようだね」

「そうだな」

「じゃあ、帰りますか」

そう言った椎菜はゆっくりと坂を下り始める。仁人はしばらく状況が飲み込めないで、立ち尽くしてしまう。

「あれ？帰らないの？」

少し進んだところで、仁人がついて来ていないことに気づいた椎

菜は振り向いて、仁人を見つめる。

「え、ああ、帰るけど……」

「けど？」

縛られていない椎菜の短い黒髪がそつと風になびく。未だ立ち止まったままの仁人のところまで戻ってくる。

「一緒に帰ろ？」

そつと椎菜の右手が仁人の左手を握り、誘うように引く。あまりにも自然だったので、仁人は声もあげることでもできず、椎菜に導かれるまま、引かれるがまま椎菜の隣を歩き出す。

手を繋ぐってほどではない。掴むって感じで、握手みたいなもののに、向こうはまったく何も意識していないだろうに、仁人の心臓はフルスロットルで血液を送り出す。冷めてきていた身体がまた火照り始める。しっとり左手に汗が浮かび上がってくる。もう仁人はまともに椎菜の顔を見ることが出来ないようになっていた。

椎菜の家は仁人の家からそんなに離れていない地区にあり、もう夜も遅いということもあって、仁人は椎菜を家まで送り届ける。

その道中、何を話したか仁人は緊張の余りまったく覚えていない。とりあえず、変なことだけは言っていないことを祈るばかりである。部屋に着いた仁人は制服を脱がずに、右肩からスポーツバッグを落とすと、そのままベッドへ俯せに倒れ込む。ベッドのマットが心地よく、包むように押し返してくる。仁人は身を任せるように体を沈める。

「ふう」

寝返りを打って、仰向けになって天井を眺めながら息を大きく吐き出す。まだ少し心臓が通常営業になっていない。左手を持ちあげて、手のひらをぼんやりと眺める。

「ねえねえ、兄い」

仁人の部屋の扉が突然開け放たれて、妹が勢いよく乱入してくる。

地元中学の制服を着たままの妹はベッドに寝転んでいる仁人を一瞥する。仁人は焦りながらも、いつものことなのでゆっくりと出入り口のほうに視線を飛ばす。

「兄い、元気ない？」

「なぜ？」

「なんか体調、悪そうだよ」

妹は心配そうな声でぼそぼそつぶやく。

仁人は特に心当たりがなかったが、それで厄介ごとに巻き込まれないで済むなら、そういうことにしておく。

「そうだな」

「じゃあ、仕方ない。ちょっとは手加減してやるか」

どうやら、妹の思考には仁人を巻き込まないという選択肢はないようである。

仁人はなぜにこうもはた迷惑な奴らばかりが自分の周りにいるのかと、人間関係の配置を考えた奴に交代を要求する。

「どうしてそうなる」

「ええー、兄いのケチー」

妹はぶーぶー口を尖らせながら仁人の部屋から立ち去る。災厄が少し大きめの足音で遠ざかっていくのをぼんやりと聞きながら、仁人は全身の力を抜いてベッドに身を沈める。

妹の足音が完全に聞こえなくなった頃、仁人は完全に呆けていた。いや、惚けていた。先ほどまでのことの、校門で起こった出来事の余韻に浸っている。時折、見えないはずの椎菜の笑顔が仁人には天井に浮かび上がっていた。

「椎菜……」

寝返りを打ちながら、ぼそりと名前をつぶやく。当然、視界も天井から壁側、机や本棚のほうに移る。

「……………」

仁人の視線が一点に固定される。本棚の一段、本は並んでいない雑貨や置物などが置かれている段に。そこに置かれた楯に。

それは中学の最後の県大会で、三位だったときのものだ。仁人にとって、いろいろと思い出深い初めての楯である。

視線とともに動きも止まる。先ほどの興奮が一気に冷めて、冷静にされる。

「ああ……」

横たえていた身体を起こして、ベッドの上に胡坐をかいて座る。心臓はいつの間にか淡々と仕事をこなしている。

「そうだった……僕には……」

先ほどのまでの浮かれっぷりはどこへやら、仁人は突然テンション低くぼんやりと天井を見上げながらつぶやく。当時のことを少し思い出しながら。

家まで送ってくれた仁人を玄関ですっと手を振って、その後ろ姿が見えなくなってから椎菜は家の中へと入っていった。

「ただいま」

玄関からすぐに自室へと上がらず、まずリビングに顔を出す。リビングでは母がテーブルの上のノートパソコンとにらめっこしていた。

「ああ、おかえりなさい」

「ただいま」

椎菜が帰ってきたことに気づいた母はノートパソコンの画面から顔を上げると、にっこりと優しく微笑みかける。椎菜ももう一度、元氣よく帰宅を伝える。

「なにかいいことでもあったの？」

母は少し意地悪な笑みに顔をゆがめる。なんでもお見通しだと言いたげである。

「うーん、どうだろ」

「ふふ、まあ、いいわ。さあ、もうすぐ父さんが帰ってくる頃よ。着替えてらっしゃい」

「はい」

椎菜は一旦、着替えるために自室へと上がっていく。母は夕食の準備を始めるためにパソコンをスリープ状態にしてキッチンへと向かう。

自室へと上がった椎菜は制服からもこのルームウェアに着替えてすぐにリビングに降りず、ベッドに身を投げる。心地よい反発を受けて、ふかふかの布団に包まれる。お日様の匂いが立ち上ってくる。椎菜はしばらく掛け布団に顔を埋める。

今日一日のことを思い出す。朝、仁人に会って少し話したこと。

「もう亜樹ったら、無理言っちゃって……」

放課後も図書館に來た仁人と話したこと。

「仁人くんって、頼まれごとは断れないのかなあ」

生徒会室で飲んだミルクティーと生徒会長が言っていたこと。

「ルフナかあ……今度、探してみよ」

椎菜の頬が自然と弛んでいく。ミルクティーの味を思い出して、瞳までとろんとしてくる。

そして、仁人と一緒に帰って家まで送ってもらったこと。

「あれはちょっと大胆だったかな……」

思い出して、今さらながら顔が赤くなってくる。それを隠すようにさらに羽毛布団に顔を押し付ける。

「今日もいろんなことがあったな」

少し荒れた息を整え、仰向けになってぼんやり思い浮かべるように呟く。一度大きく伸びをして、全身の筋肉を伸ばした椎菜は勢いよくベッドから立ち上がると、そのまま自室を出て行く。

壁一面がガラス張りとなっている広い室内からは月が雲に隠されている街並みを見渡す事ができる。高級感漂う執務机がぽつんと置かれている。その上にはパソコンモニターとキーボード、マウスのみが乗っている。革張りの社長椅子に座る長身の男がモニターを見

て、思案顔をニヤリとゆがめる。

「綾瀬椎菜……俺が思っていた通り、いい女じゃないか」

壁沿いにびっちり並べられた本棚にはぎっちり書籍が詰まっている。難しそうなタイトルの本から空手の雑誌までさまざまなジャンルである。

男はマウスを操作して、新たなファイルを開く。そこには綾瀬椎菜の細かいプルフィールから人間関係までを網羅した個人情報のか塊が記されている。キーボードを手繰り寄せて、そこへ新たに一行追加する。『恋人候補』と。

試験発表初日、昨日までとは違うどこか緊張感が学校全体に漂っている。普段、勉強しないような者でもこの期間ばかりは勤勉になるうと努力する。試験が終わるまでの約一週間は部活動が禁止されるので、勉強ムード一色となるのは当然であろう。

テスト発表中でも生徒会は例外のようで、生徒会室では役員たちが仕事に追われていた。その中に生徒会長の姿はなく、副会長が指揮を執っている。生徒会では今年の仕事をこの期間中に片付けてしまわないと、冬休み返上になってしまう。勉強すべき期間だというのは皮肉なものである。

そんなてんやわんやな生徒会室の隣、応接室として使われる部屋に光義と椎菜はいた。防音設備がきっちりしているため、静かで落ち着いた空気が流れている。

「で、何か思いついたかい？」

光義はニルギリのストレートティーを一口含む。なめらかな口当たりで、爽快な後味を残していく。

「すみません。これといていい案が思い浮かびませんでした」
持ち上げていたカップを置いて、椎菜が申し訳なさそうな顔で頭を下げる。

「いや、こちらこそすまないと思っているよ。こんな時期にこんな

ことを言い出してしまつて申し訳ない。だが、私としては、ぜひ成功させたいと思っている」

真摯な瞳でじつと椎菜のことを見つめる。椎菜は少し照れ臭くなつて、そつと視線を逸らしてしまう。

「そこで、私としてはこういう案を思いついたんだが、どうだろうか」

光義はまるでこれが最善であるかのような口ぶりで、自身の計画を椎菜に聞かせる。話を聞くうちに椎菜もそれが最善だと思えてくる。

「――な感じでどうだろうか。少々準備が大変そうではあるが、やりがいはあると思う」

一通り話し終えた光義は乾いた喉を冷めた紅茶で潤す。椎菜も一息つく。

「すぐくやりがいがあると思います」

一拍置いてから、椎菜は光義の案の感想を述べる。その大きな瞳には尊敬の念が浮かんでいる。それを見て、光義は小さく笑う。

「じゃあ、さっそく明日から準備に取り掛かろうじゃないか。テスト期間で勉強したいだろうが、その時間を少し私に分けてくれないか」

「ええ、分かりました。会長こそ受験なのでは？」

「私はすでに推薦で決まっているから気楽なものだよ」

光義の軽快な笑い声が部屋中に木霊する。つられるように椎菜も笑い出す。

すでに赤みがかつた太陽が厚い雲の合間から顔を覗かせ、部屋に差し込む。もうすでに夜の帳が下りてそうな、黒い雨雲がさらなる闇に誘う夕暮れである。

部活がない時の仁人の帰宅は基本的に早い。図書館に行って勉強するような愁傷な心掛けもなければ、どっかに遊びに出る気概もな

い。そんなことより早くでも帰って、自主練を行おうとする。

「ただいま」

「およ？もう帰ってきたの？」

仁人が玄関で靴を脱いでいると、リビングから妹が棒付きキャンディーを舐めながら顔を覗かせる。

「ああ、試験発表だからな」

仁人は脱いだ靴を所定の位置に直してから、脇においてあるスポーツバッグを左肩にかけて、リビングには立ち寄らずに直接自室へと上がっていく。

自室の扉を後ろでに閉めて、スポーツバッグを机の脇に置くと、仁人はすぐにジャージに着替え始める。ふと棚の楯に目に止まり、ため息をついてから厳しい表情になる。

「僕は……」

着替え終わると、最後に首にタオルをかけて無言で階下へと降りていく。

「およ？もう出かけるの？」

仁人が靴をはいていると、リビングからちょうど妹がアイスキヤンディーをしゃぶりながら出てくる。

「ああ、走ってくる」

「ええ〜、私とゲーム〜」

「行ってきます」

玄関で身に覚えのない文句をたれている妹を無視して、仁人は早々と走り出していってしまう。本来なら軽いストレッチをしてから行くのだが、今日は妹がいるのでパスした。

今にも雨粒が落ちてきそうな雨雲が夕陽を隠しているため、辺りは夜と変わらない暗さで街灯が明々と地面を照らしている。湿気を含んだ風も雨を予感させる。

ランニングを終えた仁人は一度、家に戻ってボールを持ち出すと、

近くのコートに来て一人で自主練習に励んでいた。一人だからできることは限られているが、基礎を鍛えるには十分である。ドリブルにレイアップシュート、ジャンプシュートとこなしていく。

完全に暗くなって、ゴールリングが見えにくくなってきて初めてもう夜だということに気付いた仁人はようやくそこで練習を切り上げる。首にかけていたタオルで軽く汗を拭って、帰り支度を始める。「僕は……」

仁人は空を見上げて、そっと呟いてから自宅に向かって歩き出す。

まだまだ忙しく事務処理を行っている生徒会室の隣、応接室で椎菜と光義の二人は細かい事項を話し合っていた。大まかなところは光義の案をそのままでいく。話し合い自体もほとんど光義の意見に椎菜が同意して進んでいる。

「ふう、だいたいこんなところかね」

紅茶を三杯ほど消費したところで、話し合いがひと段落して光義が切り上げる。椎菜は少し疲れたように大きく息を吐き出す。

「もうこんな時間ですね」

部屋の時計はすでに完全下校時間近くを指していた。話し合い開始から三時間くらい経過している。

「すまない、こんな遅くまで。よかったら、送っていくよ」

今までの決定事項をまとめたメモ用紙を揃えて、光義は優しい笑顔を浮かべる。椎菜は窓の外、空が星も月も見えないほど黒い雲に覆われているのを見て、少し考える。

「そうですね……」

「別に無理にとは言わないさ」

光義はさらに優しい笑顔で微笑む。その微笑に椎菜は少し戸惑いを覚えてしまう。

「えっと……」

椎菜は困惑してしまい、なかなか次の言葉が告げないでいる。そ

れを光義は何も言わずにじつくりと微笑んだまま待つ。

「雨も降りそうだし、送っていくよ」

もう一度、光義は静かに告げる。その時点になって、椎菜も申し訳なく思えてきて、首を縦に振る。それを見て、光義はさらに笑みを深める。

空からは涙みtainな雨粒がシトシトと落ち始める。

昨晚から振り出した雨は今朝も続いている。決して強くはないが、傘を差さないでいいほど弱くない。普段、自転車通学の仁人は天候が悪い時は徒歩で通学することになっている。なので、少し寝不足気味の仁人はあくびをかみ殺しながら、坂道を登っていく。

「おはよっ」

「ん？おはよ」

左肩にかけたスポーツバッグが濡れないように若干気を配りながら振り向くと、そこには内側に青空がプリントされた傘を差した椎菜が笑顔で手を振っていた。椎菜は少し周りを気にしながら、仁人の近くまで寄ってくる。

「珍しいね、こんなところで会うなんて」

「そうだな」

笑顔で話しかけてくる椎菜に仁人はあまり顔を向けずに素っ気無く答える。そのまま二人はなんとない会話を椎菜が話して仁人がたまに相槌を打つ、そんな曖昧なやり取りで、校舎まで歩いていく。なんとなく二人の間には前までなかった気まずい雰囲気の流れていた。

「じゃあ、私、図書館の仕事があるから」

「ああ、あとで」

玄関で靴を置き替えると、椎菜は別れて図書館のほうに歩いていく。それを仁人は小さく手を挙げて見送る。椎菜が少し寂びそうな表情を浮かべていることに仁人は気付かない。仁人は静かにスポー

ツバグを左肩にかけなおして、教室へと歩いていく。

放課後になると、椎菜はすぐに光義との打ち合わせのために御殿へと赴き、仁人は早々に自主練のために帰路に着く。授業の合間もほとんど話すことなく過ぎていった。そんな日々は試験最終日の今日まで続いた。

「終わったぞー！！」

貴士の騒がしい声が教室中に響くが、誰も気にする様子がないくらい今の教室内は騒がしかった。一人だけ、仁人だけがジト目で貴士を睨みつける。

「なんだ、嬉しくないのか」

「そういうわけじゃないが……まあ、部活も再開できるし」

なんだか煮え切らない態度で仁人は曖昧な笑みを浮かべる。さすがの貴士も仁人の表情を読みきれずに、椎菜の席のほうを見てみる。しかし、すでにそこには人影がなくなっていた。

「さて、部活に行くぞ」

「ああ」

貴士は生返事を返しながら、仁人の後ろについていく。ここ数日の二人の關係に一抹の疑問を持っていたが、貴士にも何がどうなっているのかまで分からない。椎菜が生徒会長と何か計画して、その準備に追われていることは知っているが、仁人の態度がどうにも腑に落ちないでいた。

「まさか、また……」

前を歩く仁人の背中を見ながら、貴士は小さくつぶやく。そして、呆れる。なんて不器用な奴なんだと。しかし、貴士は仁人に直接、何も言わない。

テストが終わってすぐに御殿に向かった椎菜はメランコリーな気

分で渡り廊下を歩いていった。別にテストの出来が悪かったわけではない。本人も何故そんな気分なのかイマイチ分かっていない。

「疲れてきてるのかなあ」

まだぐずついた天気が続いている、すっきりしない空を見上げる。気持ちが盛り上がらないまま、椎菜はゆっくりと御殿の扉を開ける。生徒会室の隣、応接室の扉を軽くノックする。光義からはノックなしで入ってきたらいいと言われているが、椎菜は必ずノックするようにしている。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

室内ではすでに光義がノートパソコンで作業していた。光義はモニターから顔を少し上げて椎菜に微笑む。

「さあ、今日も始めようか」

「はい」

椎菜は光義の対面の席に座ると、鞆から書類を取り出して机に広げる。その間に光義は紅茶を淹れる。ここ数日繰り返されている光景である。

「今日はルフナのミルクティーだよ」

「ありがとうございます」

カップを受け取り、その水面を覗き込む。ミルクティーの薄いダークサーモン色が揺らめいて、椎菜の顔をうつすらと映し出す。

「なんか元気ないね。大丈夫かい」

「ええ」

椎菜はカップを小さく傾けて、ミルクティーを口に含む。やはり、ルフナのミルクティーは絶品であった。でも、なぜか前ほどおいしいと思わなかった。

「今日は最後の仕上げだ。がんばろう」

「はい」

椎菜は少し気合を入れた声で頷く。でも、やはりどこかあまりテンションが上がらない。それでも元気印、活発的な椎菜は元気よく

仕事を始める。

お互いに黙々と作業をこなしていく。最後の詰め作業で、事務処理的なことが多いのでどうしてもこうなってしまう。時折、光義が紅茶を淹れなおす音がするくらいで、あとはキーボードを叩く音と筆跡の音しかない。

そんな時間が三時間ほど流れた頃、二人の作業がほぼ同時に終わる。二人とも大きく息を吐き出して、体の力を少しずつ抜いていく。「終わったようだね」

「ええ、そちらも」

椎菜が身体を大きく伸ばして、凝り固まった体の緊張をほぐしていると、光義が新しいミルクティーを淹れてくれる。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

光義は優しく椎菜に微笑みかける。それに椎菜も微笑み返す。

「さあ、これで一通り終わったな」

「そうですね」

小さく頷き、ミルクティーを口に含んでホッと一息つく。甘さが疲れた体に優しく染み渡っていく。椎菜は全体重を椅子に預ける勢いで背もたれに倒れこむ。椅子が少し軋んだ音を上げる。

「今まで協力してくれてありがとうございます」

「いえ、本番はこれからですよ」

「ああ、それには及ばない。この計画は準備段階が一番の山だからね。あとはこちらで上手くやるさ」

「そうですか。私にできることがあるなら協力しますので」

「ありがとう」

光義は何度目か分からない優しい笑みを椎菜にむける。椎菜は少し解放された気分で、ようやく少し憂鬱な気分が晴れてきていた。

「椎菜くんは彼氏とかいるのかい？」

「へ？」

あまりの突拍子のなさに椎菜は驚き、口に含んでいた紅茶を噴出

しそうになるが、なんとか堪える。光義は軽快に笑い声を上げる。

「そんなに驚く事もない。ただの世間話だよ」

「そ、そうですか……」

「で、どうなんだい？」

「残念ながら、いません」

「そうかい。こんな可愛い娘を放っておくとはうちの男子どもは見
る目がないようだ」

光義の視線に少し照れしまう。真正面から褒められるのはいつに
なっても慣れないものだ。

「俺の彼女にならないか？」

だから、次の光義の台詞に椎菜はすぐに反応できなかった。

「え、えっと……」

「俺の彼女にならないか？」

光義は優しい笑顔のままもう一度、告げる。

椎菜は戸惑いと驚愕と嬉しさと罪悪感で混乱していた。光義は整
った顔つきでかつこいい。優しいところもあるし、淹れてくれる紅
茶はおいしい。ほとんどの女性なら二つ返事で了承するだろう。だ
けど、椎菜はすぐに答えられずにいた。別に光義のことが嫌いなわ
けではない。嫌いなわけじゃないけど、どうしても彼の顔が、彼の
悲しそうな顔が脳裏を横切ってしまう。

「生徒会長と図書館長のカップル。すごく絵になると思わないかい
？ 君は俺の隣に立つのに相應しい存在だ」

それだけ言うと、光義は静かに待つ。急かすわけでもなく、ただ
ゆったりと構えて、答えは分かっていると言いたげに腕を組んで微
笑みかける。

椎菜はなぜ彼が横切るのかいまいち分らない。確かに、彼は優
しくて、細かい気配りができるし、無愛想なところはあるけど、そ
れは無言の優しさで温かく包んでくれるみたいで心地よい。あの大
きくて、温かい手にもう一度包まれてみたい。このところ、光義
との用事であんまり話せていなかった。

なんか寂しいな……

そう思った瞬間、椎菜は小さな胸の苦しみを覚える。締め付けられるような、チクリとするようなそんな痛みを。そうして、ようやく椎菜は一つの想いに辿り着く。光義への答えも。

「会長、いえ、六十谷先輩。その、申し訳ないですけど、その申し出を受けることはできません。ごめんなさい」

椎菜は光義の正面に立って、すっぱりと頭を下げる。先ほどまでの余裕ある態度から一変して、光義は驚き、戸惑い、取り乱す。

「な、なぜだ!？」

「私、彼氏はいませんが、好きな人はいるようなんで」

狼狽する光義に椎菜は少し照れて恥ずかしそうに頬を赤らめながら、あふれる笑顔を浮かべる。光義が今まで見てきたどの笑顔よりも眩しく、かわいらしく、そして、自分に向いていない笑顔であった。

「では、私はこれで失礼します」

椎菜はもう一度、お辞儀するとそのまま荷物をまとめて部屋から出て行く。部屋には未だ動けないでいる光義と香り高い紅茶だけが残される。

御殿から出た椎菜は晴れ晴れとした気持ちで空を見上げる。入る時にあったメランコリーはどこかへと吹き飛んでいた。

数時間前までは実に気持ち悪い天気だったが、今は椎菜の心を移すかのように綺麗な茜雲がところどころに浮かんでいる。明日は久々にいい天気になりそうだ。

「スイッチ、入っちゃったな……」

椎菜は少し嬉しそうにつぶやくと、なんとなくしに体育館のほうを向く。何もないのに、なぜだか笑みが零れ落ちる。スキップになるのを我慢しようとしながらも、半分飛び跳ねながら図書館へと入っていく。

下

第三章

生徒にとっては地獄のようなテスト期間が終了した翌日、昨日までの天候が嘘のように冬には珍しい日本晴れである。スカッと爽快な空はまるで生徒たちの開放感を表しているかのようである。

そんな空の下、二人の生徒が屋上にいた。男子生徒と女子生徒が向かい合っている。女子生徒の短いスカートが風ではためき、ひらひらりと揺れ動く。

「好き、君が好き」

女子生徒の柔らかいソプラノボイスが風に流れる。少女はかわいらしい笑顔で恥ずかしさを押し隠している。少女のサイドポニーが風に揺れる。

「僕は……」

男子生徒の戸惑った声が地面に向けられる。少年は嬉しそうな、困ったようなあいまいな表情で悩んでいる。少年の視線が少女へと向けられる。

「私、仁人のことが好き、大好き！」

少女は少年の目を見つめて、もはや叫び声に近い声音で自身のありったけの想い、ありったけの気持ちを『好き』という言葉に込める。

「でも、僕は………僕には……ないんだ」

仁人は椎菜の想いを、椎菜が自分のことを好きだということを嬉しく思いながらも、どこかで受け取れない気持ちに駆られていた。自分にはそんな資格がない。その思いが想いを否定していた。

「僕には資格がないんだよ」

「資格？」

「恋人を作る資格が、君と付き合える資格が僕にはないんだ」

仁人は今にも泣き出しそうなほど悲しそうな、寂しそうな笑顔をそっと椎菜に向ける。これが悲しいけど、真実なんだよと告げるかのように。

「ごめんね、綾瀬さん」

椎菜が何も言えないでいると、仁人はより悲しそうな笑顔でその場から立ち去ろうと背を向ける。

「分からない。分からないよ、仁人」

またもや椎菜の叫び声が屋上に響き渡る。その声に仁人も一度、足を止めるが、振り返ることなく再び歩き出し、屋上から姿を消す。「分からないよ……」

椎菜の元気がなくなったソプラノボイスが昼休み終了のチャイムとともに風に流されていく。

仁人は半日、昼休みが終わってからずっと上の空であった。授業中はもちろんのこと、部活の練習中ですら心ここにあらずの状態で、貴士が代わりに指揮を執ったくらいだ。そのためかどうかは不明だが、いつもより早く練習が切り上げられた。

普段なら完全下校時間まで自主練習していく仁人だが、今日は早々と帰り支度を始めて体育館から誰も知らぬ間に姿を消していた。

「あいつ、大丈夫か？」

貴士のつぶやきが仁人がいない体育館で雑音に押し流される。

帰った仁人は無言のまま、リビングにいた妹にも母にも気づかれず事なく自室へとすぐに上がっていく。自室に入った瞬間、左肩からスポーツバッグを落としてそのままベッドに身を投げる。マットのバネが仁人の体を押し返す。

椎菜が僕のが好き？

椎菜に呼び出された屋上で昼休みに起きた衝撃的な告白を思い出す。椎菜の『好き』という言葉聞いた時の胸のときめき、嬉しさ、

喜び……そして、どうしようもないまでの罪悪感が蘇ってくる。

「僕には……資格がないんだ……」

仁人は胸を押さえながら、痛みを耐えるように胸を押さえながらそっと達観したような、諦めたような、寂しい声で漏らす。その視線の先には、やはり楯があった。

椎菜の想いを素直に受け止められたら、どれだけ楽だろうか。ただ首を縦に振るだけでいいのだけど、それができない。貴士はもう過去の事と言うが、どうもそうできない自分がいる。やっぱり、僕には恋人を作る資格はまだない。今の僕には……

仁人の脳裏には「好き」と言った時の椎菜の顔が離れないでくつきり張り付いている。それに気付くたびに、胸が締め付けられる痛みに襲われる。

白を基調としながらも、各所に色が溢れている椎菜らしい活発さが垣間見える自室で椎菜はベッドに寝そべって、ダブルサイズの枕をきつく抱きしめている。

「仁人……」

ぼそりとつぶやき、枕を抱きしめる腕の力を強める。椎菜の小さな胸ははち切れそうなほど仁人への想いが溢れている。仁人の名前をつぶやくだけで、切なくて胸が痛くなる。仁人の笑顔を思い浮かべるだけで、でへりと顔がにやけてくる。仁人の温もりを思い出すだけで、身悶えしてしまう。

「うう……、恥ずかしい」

悶えて、ベッドの上をゴロゴロ転がるものだから、さまざまな所がめくり上がり、健康的な白い肌が顔を覗かせている。部屋着の短いスカートから覗く太ももが限界ぎりぎりのラインに挑戦してる。

「でも、資格がないって……」

動きを止めた椎菜がしゅんとした声で小さく漏らす。その時の仁人の笑顔を今、思い出しても悲しくなってくる。あそこまで寂しそ

うでありながら、人を寄せ付けない笑顔を椎菜は初めて見た。

なんて悲しい笑顔をするんだろう。

椎菜はぎゅっと枕を強く、何かを打ち消さんとするかのごとく強く抱きしめる。何かを堪えるように、何かを祈るようにしばらく抱きしめた。

今年最後の学園行事、期末試験が終わった星鈴高校は開放された生徒たちの倦怠ムードが漂っている。気の早い者はすでに冬休みの計画を練り始める。それでも、授業はあるため生徒たちは消化試合に向かう野球選手のような足取りで坂道を登っていく。仁人は放課後の部活のためだけに登校しているようなもので、特に変わりはない。

「おはよっ」

自転車を押して坂を登ってる仁人の左肩が叩かれ、振り向くと、左側でサイドポニーに結んだ椎菜が笑顔でミニスカートを翻していた。

「おはよう」

仁人は微笑で応えて、スポーツバッグを右肩にかけなおす。

「仁人って、この時間に登校していたんだ」

仁人の左隣に寄り添い、椎菜は人懐っこい笑顔を浮かべる。その頬が微妙に赤くなっているのは寒さのせいだろうか。

「だいたいはこの時間かな」

「そっか……そうなんだ」

「？」

椎菜がちょっとうつむいてしまうので、仁人は疑問符を浮かべてしまう。何か変なことを言ってしまっただろうか。

「それにしても、寒いね」

「今年は例年より寒いらしい」

「うう、寒いのはあんまり好きじゃない」

椎菜が嫌そうに首を横に振り、身を縮こませる。その際、少しサイドポニーがぴよこんつと跳ねる。仁人の心臓もドキリと跳ねる。

「えへへ、寒いから急ご？」

「ああ……」

仁人はついつい椎菜の輝かしい笑顔から顔を背けてしまう。

この無垢な笑顔はやっぱりかわいい。

少し先に行く椎菜の後ろ姿、振り返る姿を眺めて、仁人は複雑な思いに駆られながら早足で後を追いかける。

二人並んで教室に入ることが少し恥ずかしい椎菜は下駄箱のところで仁人と別れて、一人図書館へと向かった。早朝開館をしているため、始業前でも何人か読書している。生徒会との合同企画のおかげか、以前より少し数が多いように思う。当番の生徒に挨拶してから、最上階にある館長室に向かう。

「ふう」

部屋に入って、椅子に腰を下ろして、大きく息を吐き出す。その顔はどこか嬉しそうに頬が緩んでいる。

「あんまり早くない時間に登校しているんだ……もっと早く来て朝練でもしてるのかと思っていたな」

窓からは体育館が見える。

「明日もこの時間にしよ」

椎菜は机の上に置かれていた書類をチェックしながら、人知れず笑みをこぼす。始業のチャイムが鳴るまで椎菜はそのまま館長室で事務処理を行う。

教室の席でいつもどおり窓の外をぼんやり眺めている仁人はいつもより三倍増しでぼんやりしている。空気が澄んでいるから、冬なのに若干空が高く感じられる。

「よう」

「おう」

始業ギリギリに現れた貴士は軽そうな鞆を片手に仁人の席にやってくる。仁人は空を眺めたまま生返事を返す。

「なんだ、微妙に元気ないな？」

「気のせいだ」

「そうとは思えないがな……」

貴士は不思議そうな顔で同じように空を見上げる。そびえ立つ図書館の時計が始業三十秒前を指していた。

「どうでもいいが、素直になれよ」

貴士が軽薄に手をふりながら去って行くと同時にチャイムが鳴ったので、仁人にはあまり聞こえなかった。

消化試合みたいな授業が終わり、昼休みになった瞬間、教室に一気に活気があふれて出してくる。学食に走る者から弁当を取り出し机を移動する者まで。

「上、行こうぜ？」

貴士は始まると同時に仁人の席にやってきて、天井を指差す。

「ああ」

ここのことろずっと仁人の席で食べていた昼を今日は屋上で食べることにする。晴れてはいるが、寒いことには変わらない。だが、それでも仁人たちは屋上へと上がることにためらわなかった。

「やっぱ、寒いな」

屋上についた瞬間、貴士が文句をもらす。

「そうだな」

仁人は吹きさらしの風を片手を掲げることで少しでも避けようとする。とりあえず、フェンス近くまで行き、そこに腰を下ろす。貴士も同じように仁人の隣に座る。しばらくお互いに無言のまま空を眺める。綿雲が風に流されていく。

「されたんだろ？」

「……」

沈黙を破った貴士に対して、仁人は沈黙を貫く。具体的に何も言わずとも伝わるのがこの二人である。

「僕にはないから……」

数分にも思えた十数秒後、仁人は重たい口を開く。

「まだ……」

「やっぱり、ないと思う。もうすぐ大会だし……」

「そっか」

「ああ」

二人はまたぼんやりと黙って空を眺め始める。大きな雲が西の空から流れてくる。

前の授業の後片付けを終えた椎菜はすぐに鞆から手提げ巾着を取り出して、席を立ち振り返る。しかし、目的の人物はすでにそこにはいなかった。

「どうしたの？ 椎菜」

同じように巾着を持った松木が不思議そうな顔で椎菜を覗き込む。その後ろで能登も疑問符を浮かべている。

「え？ ああ、ううん。なんでもない。さ、食べようっか」

椎菜は落胆と不可解な行動を隠すかのようにあいまいな笑みを浮かべる。隣の机を持ってきて、三人分のスペースを確保する。

「一緒に食べたかったな……」

椎菜の小さな願望は松木の騒がしい声にかき消され、誰にも聞こえなかった。空には大きな雲が浮かんでいる。

夕方というには早く、昼というには少し遅い放課後、寒風が吹きすさぶ屋上に二人の人影があった。短い髪を片側で結んだ女子生徒と軽薄そうな笑顔を浮かべる男子生徒が向き合っている。

「綾瀬……好きだ！」

「何の用なの？」

貴士の言葉をドスルーして、椎菜は膝を追って落ち込んでいる貴士に尋ねる。このあと、図書館の会議があるので手短に済ませたい。

「聞く必要があるか？」

「やっぱり、紀三井寺くんには話してるか」

「いや、何も聞いていない。だが、分かる」

「さすがだね。羨ましいな」

二人の関係を椎菜は素直に羨む。自分もそうなりたいて思いが溢れてくる。

「振られちゃった……僕には資格がないって」

「やっぱりな」

「ねえ、資格って何？何のことなの？」

そこで初めて貴士は困ったような表情を浮かべる。話していいものかどうか迷っているように少し考えるしぐさを見せる。

「さあな。ちなみに、あいつの誕生日は十二月二十六日だ」

貴士は軽薄そうな笑顔を浮かべて、乾いた笑い声を上げる。椎菜は直感的に貴士が何か知っていることが分かったが、あえて追求しなかった。

「で、諦めるのか？」

「ううー、女の子に直接そんなこと聞いちゃダメだよ」

椎菜は恥ずかしさから顔を真っ赤にして、両手で隠しながら顔を伏せる。その様子を見ただけで悟った貴士はもうそれ以上は何も言わず、代わりに大きな笑い声を上げる。

「わ、笑わないでよ」

「いや、ごめん。まあ、なんだ、がんばれよ」

「うん」

大きくうなづく椎菜の笑顔がまぶしすぎて、貴士はまた笑い声を上げるのであった。とんだカップルだと。

人気者は忙しいのが世の常である。あっちで呼ばれば、こっちで召集がかかる。屋上から図書館に直行した椎菜は最上階の事務室兼会議室の前で息を整える。大きく深呼吸してから、ゆっくりその扉を開ける。

「ごめん、遅くなって。さっそく始めるよ」

すでに室内には館員たちがそろっており、椎菜が最後であった。

椎菜は急いでいつもの席に座って、会議を開始する。誰一人、椎菜が遅れたことを咎めず、スムーズに会議は進行していく。

会議は遅くまで続き、終わった頃には外は暗くなっていた。雲の合間からオリオン座が瞬いている。

「ふう、これで今日の業務も終了かな」

誰も残っていない会議室で最後の資料整理を行っていた椎菜が伸びをしながら一息つく。ふと、ここで仁人が紅茶でも出してくれたらなあ……と妄想してしまい、顔を赤らめる。

「執事服の仁人、かっこよすぎだよ……」

椎菜の恥ずかしい独り言が室内に響き渡る。椎菜の顔はさらに赤みを増していく。

「もう部活、終わったのかなあ」

窓の外、体育館のほうに視線をやる。まだ明かりが点いている体育館を見つけて、自然と笑みがこぼれる。

「そうだ」

椎菜は意味深な笑顔を浮かべると、資料をかき集めて帰宅の支度を急ぐ。

貴士が遅れて現れた部活はすでに終わり、今は各人自由参加の自己練習時間となっている。体育館には仁人、貴士をはじめ数人の部員が残って練習している。

「そろそろ帰るか」

右斜め四十五度の位置からシュート練習していた仁人に貴士が近

づく。

「ああ、そうだな」

綺麗なジャンプシュートを放ってから仁人は答える。ボールは綺麗な放物線を描いて、ゴールネットを揺らして落ちる。数回跳ねたボールを拾い上げ、羽多野がダンクシュートをしようと飛び上がるが、あと数センチのところまで届かない。

「ちっ、もうちょいか。つうわけで、後片付けは俺たちがやっつく」

「頼んだ」

貴士と仁人は羽多野に手を振って、部室へと向かう。羽多野は悔しそうに笑いながらボールを片付け始める。

二人が体育館から出てくると、当然のように辺りは暗かった。雲の合間から覗くオリオン座と朧月が出迎えてくれる。二人して駐輪所のほうへと歩いている途中で、貴士が突然携帯電話を取り出し、何かを確認するそぶりを見せる。

「うむ、急用だ。俺は先に行くぜ」

そう言って、貴士はグラウンドのほうへと走り去ってしまう。仁人はその後ろ姿を見送りながら、いつものことなので深く考えずに一人帰るため歩き出す。

「お疲れ」

「えっ……綾瀬さん!？」

薄暗い駐輪所にたどり着いた瞬間、声をかけられて驚いた仁人はそれが誰なのか分かってさらに驚く。

「綾瀬さん? 椎菜って呼んで欲しいな」

「あ、えっと……」

「ダメ?」

椎菜は上目遣いで潤んだ瞳で戸惑う仁人に詰め寄る。卑怯だと思いなながらも、そのかわいさに目が奪われる仁人を誰が攻められるだろうか。

「し、椎菜……」

「ううう、やっぱり恥ずかしい」

呼んだ方も呼ばれた方も顔を真っ赤に染めて、視線を泳がせる。

このまま二人してずっと照れ合っているも仕方ないので、とりあえず帰宅の路につくことにする。仁人はスポーツバッグを右肩にかけなおし、自転車を手右側に押して椎菜の右隣を無言で歩く。

「いつも遅くまで部活してるよね？」

「もうすぐ大会だから」

坂を半分ほど下りたところで、沈黙に耐えかねた椎菜が口を開く。

仁人が素っ気無く前を見据えながら答える。

「綾瀬さんも遅いよね」

「椎菜」

「椎菜……」

「うん」

まだ微妙に照れが残る仁人を少しかわいと思う椎菜はいぬ座のプロキオンみたいな笑顔を輝かせる。

「まあ、いろいろ図書館長も忙しいのだよ」

「大変だね」

「そうでもないかな？楽しいし、本が好きだから。仁人もバスケットが好きで遅くまでやっているんでしょ？」

「そうだけど」

「じゃあ、それと一緒にだよ」

横目で見た椎菜の笑顔が可愛くて、嬉しそうで、まぶしくて、仁人は一瞬、息することも忘れてしまうほど見惚れてしまう。

「仁人のこと、大好きだよ」

あまりにも不意打ちの椎菜の言葉に仁人は立ち止まってしまう。心臓は過労で止まってしまうんじゃないかと思えるくらいフルスロットルで跳ねている。不意打ち過ぎて、ストレートに心に突き刺さる。

僕も……

先に続く言葉をなんとか心の奥底に押し込める。瞬間に蘇った記憶が仁人にそうさせる。

「ありがと。でも、僕には資格がないんだ」

また何かを諦めたような、悟っているような、そんな寂しい笑顔を浮かべる。そんな表情の仁人を見て、椎菜は一瞬また何も言えなくなる。

「ねえ、資格って何？」

しかし、椎菜は勇気を振り絞って、少しかすれた声を上げる。仁人がさらに悲しそうに笑うと、椎菜は胸を締め付けられる。

「今は大会が近いから部活が忙しいから」

「それって……」

椎菜はそれ以上続けることができずに詰まってしまう。

「着いたよ」

気づくと、すでに椎菜の家の前まで来ていた。なんでもっと遠くに家がないのかと理不尽なことを思ったが、素直に椎菜は仁人と別れる。

「ありがと。また明日」

「また明日」

手を振る椎菜に背を向けて、仁人は自転車に跨り走り出す。

「おやすみ、仁人」

椎菜のソプラノボイスが闇夜に消える。月が雲から抜け出して、顔を覗かせていた。

月明かりに照らされた室内ではパソコンのモニターがぼんやりと光っているだけで、電灯は付いていない。メッシュ地のハイバックチェアに長身の男が深く腰掛けている。その隣にもう一人、人影が立っている。

「どうしてなんだ……」

光義は隣に立つ生徒会副会長、後藤 美夏に問う。しかし、後藤は何も答えない。何も答えられない。

「もういいではないでしょうか」

後藤は優しく労るように話しかける。光義は不機嫌に顔をゆがめて、後藤をきつく睨みつける。後藤はおびえたように身を竦ませる。「俺が欲しいのは己の名誉だ。それを手に入れるためなら誰だって利用する。人望も厚く、人気がある図書館長と付き合ったとなれば、俺の株も上がるというのに」

「わ、私では駄目なのでしょか……」

後藤が恐る恐る、期待を込めて尋ねてみるが、光義に一睨みで一蹴される。

「お前ではもう俺の株が上がることはないのだよ」

後藤は悔しそうに顔を伏せる。その瞳には大粒の涙が浮かぶが、決してそれを光義に見せないよう必死に堪える。

光義は何かを考え込むように腕を組んで、静かに一点を見つめ続ける。なぜここまで椎菜にこだわるのか自分でも分からずに、ずっと椎菜のことを考え続ける。

お風呂上りで火照った体をパジャマに包んだ椎菜が自室に戻ってくる。湿った髪の毛が艶やかに垂れ下がっている。椎菜はそのまま髪を乾かさずにベッドへとダイブする。そこで、ベッドに放置していた携帯電話が光っていることに気づく。

「誰だろ？」

仁人かもという淡い期待を抱きながら、携帯の画面を確認する。数分前に亜樹から着信があったようである。

「亜樹からか……」

椎菜は少し落胆しながら、亜樹へと電話をかける。数回のコールのあと、すぐにつながる。

「亜樹？ごめん、お風呂入ってた」

『そうなんだ』

「で、どうしたの？」

『うん、なんか今日の椎菜、ちょっと変だったから気になって』

松木には珍しく声のトーンが少し低い。

「え？　そうかなあ」

椎菜は少し誤魔化すように曖昧に流す。

『そうだよ。ご飯のときもなんかそわそわしていたし』

「うっ」

『ほら。何があつたのか白状せい』

「何もないよ」

『嘘だあゝ何か隠しているよ』

「実は……」

椎菜は観念して仁人のことを話そうかと思ったけど、やはり恥ずかしくなって言葉が詰まってしまう。

『実は、何よ？』

「やっぱり、ひ・み・つ」

『なに、それ』

椎菜はいたずらっぽく言う。松木もそれ以上は深く聞いてこず、そのまま普段の雑談へと移行していく。そうして、今宵も夜が更けていく。

冷たい空気が澄んでおり、爽快な朝を演出している。だが、それを歓迎している者は数少なく、ほとんどの者は寒さに身を縮める。コートを着込んだ仁人もその一人である。

坂の麓で自転車を降りて、長い坂道をひた登る。少し登ったところで、前に椎菜の後ろ姿を発見する。一瞬、声をかけようかどうか迷う。

「あっ、仁人」

気づいた椎菜に先に声をかけられる。

「おはよ、綾瀬さん」

「綾瀬さん？」

「し、椎菜」

「うん、おはよう」

嬉しそうにうなづく椎菜。その笑顔に仁人の視線は奪われてしまう。途中で、恥ずかしくなって顔を背けてしまう。椎菜のほうもだんだんと恥ずかしくなってきた、顔を赤らめてしまう。

「い、行こうっか」

「そうだね」

いつの間にか立ち止まっていた二人を他の生徒たちが邪魔そうに避けて行くことに気づいて並んで歩き出す。

しばらく二人とも黙々と坂を登っていく。だが、どちらとなしに話し出し、坂を半分ほど登った頃には楽しげに会話を交わしていた。

やはり玄関で別れた椎菜と仁人はそれぞれ、図書館と教室へと向かう。椎菜が図書館に行くと、入り口近くのテーブルに松木が座っていた。

「あれ、亜樹？ 珍しい」

「やっぱり、気になってね」

読んでいた本を置いて近づいてくる松木は愛くるしい笑顔を浮かべている。けど、そこには逃がさないって意思も感じ取れる。

「ここじゃなんだから、上、行こっか？」

「そうだね」

朝で人が少ないとはいえ、やはり図書館でしゃべるのはよくないので館長室に場所を移すことにする。

館長室に着いてすぐに椎菜は窓を開ける。室内の淀んでいた空気が一掃され、澄んだ空気が室内に飛び込んでくる。ついでに、寒さも運んでくる。

「窓開けたら、寒いよ」

「でも、空気を入れ替えないと」

椎菜は全開にしていた窓を少しだけ残して閉める。松木はとりあえず近くのパイプ椅子に座り、椎菜も館長席という名のオフィスチ

エアに座る。

「で、何があったの？」

「ううう、どうしても話さないとダメ？」

「だ・め」

椎菜の顔が少し赤くなるのを松木は見逃さない。

「なんか、こここのところの椎菜、なんかちょっと楽しそうっていか、嬉しそうっていうか……元氣だよな？」

「元氣？」

「うん、元氣。漫画とかに出てくる恋する乙女みたい」

松木は何気なく言ったのだが、椎菜はドキリとしてしまう。まさに恋する乙女そのものであるから。

「恋する乙女か……」

うっとりとした瞳を抱いた瞳でぼんやりと天井を仰ぐ椎菜を松木は見逃さない。これは恋していると確信する。

「相手は誰？」

「そ、それは言えないよ」

椎菜は顔を真っ赤にして、手をぶんぶん振って拒否する。

「ってことはいるんだ」

「あっ!？」

松木の策略に見事にはまった事に気づいた椎菜はさらに顔を赤くする。松木はニヤリといやらしい笑みを浮かべる。

「ほら、白状しちゃえ」

「ダメダメ、これだけは無理」

抱きついてくる松木から室内を逃げ惑う。図書館にあるまじき騒がしさが館長自ら生み出している。追いかけてこは始業の予鈴が鳴るまで続けられた。

その日も椎菜の密かな猛烈アタックは繰り返された。昼休みはさりげなく一緒に食べるように誘ってみたり、授業の合間には積極

的に自然と話しかけたり、偶然を装って一緒に帰ったり。一つ一つに仁人は反応は示してくれるが、やはり最後は「資格がないから」と拒まれてしまっていた。

その様子をたまに見かけていた光義は心を痛め、憤りと同時に悲しみを感じていた。

「どういふことなんだ……」

相変わらず夜が更けても照明が点けられない室内で光義はソファに身を沈めて、天井を眺めながら一人ゴチる。そばにメイドの清水しみず葉月はづきがいようともしないし、清水も何も言わずに主人の側に仕える。

「あの男、あの男のどこが……」

光義は体を起こして、窓の外を睨みつける。小さいながらも街である高城市の夜景は十萬ドルほどの輝きである。

「光義様、差し出がましいようですが」

「なんだ」

ずっと黙っていた清水が挙動もなしに急に口を開く。

「本当にその、椎菜って少女のことが好きなんですね」

「俺が、椎菜のことを好き？」

光義は疑問に思うが、清水はかまわずに先を続ける。

「そこまで想っているのは好きだからではないでしょうか？」

「……」

考えもしなかったことに光義は驚きながらも、真剣にそこについて考え込む。

今まで誰かを好きになったことはない。付き合った女は己の名誉のため、踏み台として付き合ったにすぎない。けど、椎菜はどこか違う。違っていた。その違いが分からずにモヤモヤしていたものが晴れていく。ようやく燦っていた想いが何なのか気づく。

清水はそれ以上何も言わず、何事もなかったかのように先ほどと同じように光義の側に立ち続ける。

今朝も仁人と椎菜は一緒に登校しながらも、靴箱で分かれて別々に教室へと入っていく。まだお互いに恥ずかしさがあるのと、椎菜に図書館の仕事があるからである。

図書館に向かう渡り廊下に誰か立っているのが遠目に見えた椎菜はそれが誰なのか考えながら近付く。

「やあ、おはよう、椎菜くん」

「おはようございます」

もたれていた柱から長身の体を起こして、光義が挨拶してくる。珍しく左腕に生徒会の腕章をしていない。

「すまない、こんな待ち伏せのようなことをしてしまつて」

「いえ、別に気にしません」

光義は軽く頭を下げて、少しずれた眼鏡の位置を直す。椎菜は少し固い笑顔で応える。

「で、どうしたんですか、こんな朝早くに」

「ちよつと個人的な話があつて……」

光義は歯切れが悪く、言葉を詰まらせる。

「ここで立ち話もなんだ、生徒会室にでも行かないか？」

「ええ、構いませんけど」

二人は渡り廊下から外れて、図書館の隣にある御殿に向かう。何度も通った道筋で生徒会室へと入っていく。生徒会室には誰もいなかったが、暖房が効いているので温かい。

「まあ、話というか宣言みたいなものかな」

「宣言、ですか？」

少し強張っている光義と違って、話が見えない椎菜は緊張感が無い。光義は少し深呼吸してから意を決して、椎菜を見据える。その視線に椎菜を射すくめられる。

「先日、椎菜くんは好きな人はいると言つた。そう言つて、俺の彼女にならないと断つた。だが、俺は諦めない。俺は君が振り向いてくれるまで、君を諦めない。俺は君が好きだ」

一気に捲くし立てた光義は真剣な眼差しで椎菜の瞳を覗き込む。
最初から最後まで一切視線を外さずにいた。

「私は……」

「返事はいらぬ。これは宣言なんだから」

椎菜は口を開こうとすると、光義はそれを止めて首を横に振る。

「さあ、話は以上だ」

光義はいつものように生徒会長席に座ると、机の上に置いてあった腕章を左腕にはめる。それで光義個人から生徒会長へとなったかのように。

「し、失礼します」

どうすればいいか分からなくなった椎菜は早々に生徒会室から出て行く。椎菜が後ろ手に閉めた扉の音が静かな御殿に響き渡る。

椎菜は生徒会室から直行で館長室へと入る。途中で当番の生徒が話しかけてきたが「あとで」と言って取り合わずに上がってきた。

「ふう」

オフィスチェアに身を沈めて、大きく息を吐き出す。先ほどの光義の言葉を思い出して、また息を吐き出す。前とは違う真剣さが感じ取れたような気がしたが、思い過ぎのような気がしなくもない。

「仁人……」

急に切なくて、寂しくなった椎菜は椅子の上で体育座りになって、膝を抱き寄せて身を丸める。何かを祈るように、何か助けを求めるように。

そこに携帯が鳴り、椎菜は慌てて鞆から取り出してマナーモードにする。こんな時にメールしてくる空気読めないのは誰かと少し怒りながら、新着メールを確認する。

「仁人？」

それは初めての仁人からのメールであった。

『いつも図書館のお仕事、お疲れ様』

たったそれだけの絵文字も顔文字もない素っ気無い文面。けれど、椎菜にとってはどんな言葉よりも嬉しくて、感動的で、愛おしいメールであった。

椎菜は何も言えず、ただただ携帯電話を大事に抱きして、溢れそうになる涙を留めるのに必死になる。

終業のチャイムと同時に仁人は体育館へと貴士と共に急いで向かった。今日から練習メニューを大会に向けた実戦的なものに切り替えるので、二人とも気合十分で駆けて行った。そこに運悪く仁人に用事があった黒松が教室にやってくる。

「って、もういないのかよ」

能登から仁人不在の報を聞いた黒松は落胆して、道場へと向かうとするところを椎菜に見つかる。

「ちょうどよかった。ちょっと話があるの」

「なんだよ、椎菜」

椎菜は黒松の袖を掴むと、そのまま引きずるように教室から飛び出していく。こけないように気を配りながら、黒松は椎菜に引っ張られるがままついていく。

二人がやってきたのは寒くなってからは誰も寄り付かなくなった屋上。そのわりに、椎菜は最近よくここに来ているような気がする。「どうしたんだよ」

ようやく解放された黒松が悪態づく。

「教えて欲しいの」

「何をだ？」

椎菜の上目遣いに少し気持ちが持っていかれそうになった黒松は誤魔化すようにそっぽを向く。体育館ではすでにバスケット部が活動を開始しているのか、気合の入った叫び声が風に乗って聞こえてくる。「え、えっと……」

椎菜は一度言葉を詰まらせて俯いてしまう。恥ずかしさがこみ上

げてくるが、それを必死に押さえて意を決する。一度深呼吸してから勢いよく、短いサイドポニーが揺れるほど勢いよく顔を上げて黒松を見つめる。

「教えて、なんで仁人が『恋人を作る資格がない』って言うか」「お前、それって……」

黒松が驚いて目を見開く。椎菜の顔が赤くなっていく。けど、覚悟の表れであるかのように決して顔を背けない。

「そうか、そんなのか……」

黒松は少し落胆したように呟くと、晴れてはいるが低い空を仰ぎ見る。そして、フェンスにもたれるように座って息を吐き出す。

「俺も詳しく本人から聞いたわけじゃないからよく知らないが、寺が言うには、中学の頃にいろいろあったらしいぜ」

「いろいろって何？」

椎菜は覚悟を決めて、黒松に尋ねる。黒松は一拍置いてからゆっくりと話し始める。

「当時両想いだった彼女がいたそうだ。その彼女の急な呼び出しに大事なバスケの試合で応じられなかったことがあって、それが原因で別れたとか、なんとか」

「それって……」

「その時、言われたらしい。『常に相手できないなら資格はない』って」

「そんなのって……」

「それでも、あいつは自分には資格がないって思っているらしい」椎菜は胸が苦しくなるのを我慢して、言葉を紡ぎ出す。すべてがショックだった。両想いの彼女がいたこともそうだけど、仁人が資格がないと言う理由に衝撃を受ける。

それは違う。違うよ、仁人。そんなのって、そんなのってないよ。

「行かなくちゃ」

「行くって、どこにだよ」

俯いていた椎菜は急に頭を上げると、屋上から駆け出していく。

その背中に投げつけられた黒松の言葉は耳に入っていない。

「あーあ、行っちゃまった。昔からたまにスイッチ入っちゃうと、暴走癖が出るんだから」

寒空の下、一人残された黒松がため息と共に漏らす。眺める空が少し歪んでいた。

すでにアップ、フットワークを終えたバスケット部はオフセンス二人、ディフェンス三人の実戦形式の練習に入っていた。

「ほいよ」

「シュツ」

貴士のパスがディフェンダーの股下をバンドして通り抜け、フリーになった仁人の手に吸い込まれる。仁人はそのままノーモーションでジャンプシュートを放つ。必死に飛び出して阻止しようとするが、ボールは綺麗にゴールへの放物線を描き、ネットを揺らす。

「貴士へのダブルチームが甘い。羽多野もディフェンスが遅れすぎだ」

「ああ」

顔の汗をリストバンドで拭いながら、羽多野は頷く。コートには次のチームが入り、オフセンス側が攻めあぐねている。

「ボール持っている者だけじゃなく、持っていない者ほど動かないと」

「はい！」

威勢のいい声が体育館中に響き渡る。隣で練習しているバレー部も気迫で負けまいと大声を出している。

「仁人！」

そんな怒号のような叫び声が飛び交う体育館によく通る凜としたソプラノボイスが彗星のごとく現れる。あまりのことに体育館は一瞬静まり返り、誰もがその声の主のほうへと視線を移す。もちろん名前を呼ばれた張本人も。一人だけが笑みを浮かべる。

「椎菜？」

「ちょっと借りるね。いいでしょ？紀三井寺くん」

「どうぞどうぞ」

状況を把握しているかのごとく貴士は仁人を椎菜へと差し出す。

「ちょ、ちょっと、貴士」

「いいから行って来い」

仁人が貴士に押し出されるように椎菜の前にやってくる。その様子を体育館にいる全員が目にする。

「ありがとう」

そう言い残して、椎菜は仁人の手を握って体育館から颯爽と立ち去る。二人が姿を消してようやく体育館にざわめきが戻ってくる。

体育館から少し離れた裏庭に二人はやってくる。ここには今は止まっている噴水や池、ベンチなどがあり、芝生が敷き詰められており、春になれば生徒が集まる場所となっている。今は閑散としており、花壇には何も咲いておらず、落ち葉が散乱している。

とりあえず、二人は池近くのベンチに並んで座る。座る寸前、仁人がベンチの落ち葉を払いのける。

「ありがとう」

「うん」

それから少しの間、お互いに黙ってしまい無言の時が進む。一筋の飛行機雲が空を縦断している。風が吹くたびに枯葉が舞い散る。

「あのね、聞いたの……」

握ったままだった手を少し力を入れて確かめ、椎菜がぼそりと口を開く。手からは仁人の少し高い体温を感じ取れる。

「仁人が『資格がない』っていう理由」

「そう」

仁人は少し悲しそうな口調で短く漏らす。

「それって間違っているよ。そんなのおかしい。仁人は別に悪くな

い。仕方ないじゃない。彼女だからって常に相手する必要なんてないよ！」

椎菜は立ち上がって、仁人を見つめる。その際、手が離れてしまう。

「……」

仁人は静かに今にも泣きだしそうなほど瞳を潤ませている椎菜を見つめる。胸が締め付けられるように痛くなり、苦しい。

「そうかもしれない……でも……」

仁人はやはり悲しげな、悟りきったような、諦めたあの寂しい笑顔を浮かべる。もう何度目か分からないあの切ない笑顔。

「今はバスケが忙しいから……」

「そんなの、逃げてるだけじゃない。私だって図書館長の仕事で忙しいよ。でも、それは関係ないじゃない。恋するのに、付き合うのに資格なんていらなんだよ！」

椎菜の必死の叫びが裏庭に木霊する。

「ねえ、聞いて。私の話……」

仁人の隣に座りなおした椎菜が遠い空を眺めながら語り始める。離れてしまった手をもう一度、重ね合わせて。仁人も同じように空を眺める。

「昔、私にも好きな人がいたんだ。片思いだったんだけどね。ずっと好きだったけど、恥ずかしくて遠くから見ているだけで精一杯だった。話すだけでもう卒倒してしまいそうだったから、ほとんど話すこともできなかったんだ」

当時を懐かしむように椎菜が頬を赤らめる。それを横目で見た仁人はまたチクリと胸に痛みを覚える。

「そんなことしていたら、その人が急に遠くへ引越しすることになったの。凄く悲しくて何日か泣き明かしちゃった。目、真っ赤になるくらい。でも、結局、最後の日も想いを告げることができず、離れ離れになっちゃった」

初めて聞いた椎菜の過去に仁人は胸がはち切れそうだった。寂し

そうに空を眺める椎菜を見ることができない。

「だから、私は告げるようにしたの。好きな人には好きって想いを」
仁人は合わされた手をそっと握り締める。そこから椎菜の体温が、
温かさが伝わってくる。

「仁人、私は貴方が好き」

真っ直ぐ仁人を見つめて、手を握り返して、椎菜は想いをそっと
告げる。仁人の体温を感じながら。

「僕は……」

続く言葉が紡げない。まだ胸のうちでわだかまりが渦巻いている。
資格がない……ないんだ。じゃあ、資格って何だ？忙しいっての
は逃げ？分からない。分からないよ……

「ごめん。ちょっと一人にして」

「分かった……」

椎菜は名残惜しい想いを残しながら、手を離して席を立つ。先ほ
どまで温かった手が急に冷たくなったような感覚に襲われる。そ
して、ゆっくりと仁人に背を向けて、歩き始める。側にいられない
悔しさや悲しさ、諸々の想いを胸に秘めて。

一人残った裏庭で仁人は動けずにベンチで佇む。冷たい風が仁人
の体温を奪っていくが、それが逆に心地よい。熱に浮かされる頭を
冷やしていつてくれるようである。

「僕は……」

水の止まった噴水を眺めて、ぼんやりとつぶやく。自分が今、何
をしているのかイマイチ分からない。練習に戻らないといけないは
ずなのに、体が言うことを聞いてくれそうにない。

「お前がこんなところでサボりとは、明日はロングヌスでも降るんじ
ゃないか？」

「黒松？」

仁人が物思いに耽っていると、突然声をかけられた。顔を上げる

と、そこには片手をあげている黒松が道着姿で立っていた。

「お前にちよつと用事があつたんだが、それどころじゃなさそうだな」

「ああ、すまない。今は――」

仁人が一人にしてみらいたいと言おうとするのを無視して、黒松は仁人の隣に腰掛ける。黒松は後ろに手をつけて、天を仰ぎ見る。

「俺はお前のことも、あいつのことも知っている」

黒松は仁人のほうを向かず、空を眺めたまましゃべり始める。仁人は戸惑いながらも、静かに黒松の言葉を聞く。

「特に、あいつのことは昔から知っている、少なくともお前よりもずっと一緒だったんだからな。あいつは何かスイッチが入ると、暴走しちまう癖がある。そりゃもう大変だったさ。でも、本人はそんな気もなけりゃ、悪気なんてあるわけもない。それがなぜか輝いて見えるんだから不思議なもんさ。そんなあいつも恋愛には臆病だったんだ。常に怯えていた。嫌われるんじゃないかって。今も、大胆な行動に出ているが、内心は怯えているんじゃないか？それを取り除いてやれるのは、あいつを笑顔にしてやれるのはこの世でたった一人しかない。残念だが、それは長年一緒にいた俺じゃない」

黒松はそこまでを一気に、誰に語るでもなく独り言のようにつぶやく。独り言なのだから返事はいらぬ。仁人は相槌も打たず、ただただ黙って聞き続ける。

「俺じゃないんだよ……」

黒松は静かに最後の言葉を繰り返す。

「黒松、もしかして……」

「もうそろそろ休憩時間が終わるな。俺、行くわ」

仁人の言葉が聞こえない振りして、黒松は立ち上がるとそのまま振り返りもせずに道場のほうへと歩いていく。

「お前ならお似合いだと思うぞ」

校舎と体育館の渡り廊下あたりで黒松は一度立ち止まると、それだけ言って片手をあげながらまた歩きだす。その後ろ姿を仁人はじ

つと見つめ続ける。

しばらくしてから体育館に戻った仁人だったが、心にここに非ずな状態であるため、貴士の強引な勧めによって帰宅を命じられた。部活の途中で帰るという行為を仁人は初めて体験することになる。

着替えのために入った部室で仁人はすぐに着替えずパイプ椅子に腰を下ろして天を仰ぐ。さまざまな想いが、それぞれの思いが頭を駆け巡ってはぐるぐると同じところばかりを巡り続ける。

僕には資格がない……常に相手する必要はないって椎菜は言っていたけど……忙しさに逃げているって……資格って何だ？僕は……体を起こすと、壁に貼られた一枚の賞状が見える。貴士が何もなくてさみしいからと持ってきた。中学最後の大会で取った、あの楯と一緒に貰った三位の賞状である。

あいつは僕に『常に一緒にいるのが当たり前』って言った。当時の僕にはそれだけが正解だった。けど、今は……

もう一度背もたれに体重をかけて、天井を望む。

椎菜の想いは正直、嬉しい。嬉しいけど、僕に応えることができないのだろうか。黒松は僕にならできるようなことを言っていたけど、でも、あいつは……

黒松の言葉を思い出し、仁人は少し申し訳ない気持ちで湧き上がってきて、気分がさらに沈み込む。

僕に何ができるんだろうか。僕には資格がない。椎菜の気持ちに応えられない。黒松の期待にも応えられない。僕はどうすれば……ふと椎菜の笑顔が浮かび、それがさびしげなものに変わっていき消えていく。幻想でしかないはずなのに、仁人は胸の苦しみに襲われる。

「僕は……どうしたいんだろう」

胸の痛みに耐えながら、仁人は苦しみを紛らわすかのように小さくつぶやく。それはどこか助けを求めているように見えた。

しかし、ドア向こうで聞いていた貴士はそのまま部室に入ることなく、背を向けて無言のまま沈痛な面持ちで立ち去っていく。

裏庭に仁人を一人残して、椎菜は寂しさを堪えながら図書館のほうへと歩いていく。視界が少し歪んでいて見えにくい。縦断していた飛行機雲が半分くらい消えかけている。

「やっぱり、ダメ……なのかな？」

椎菜のつぶやきは誰にも聞かれずに寒風が攫っていく。椎菜の沈み込んだ気持ちを表すかのように歩速はだんだん遅くなっていく。

「そんな顔して、どうかしたのかい？」

ちやうど御殿の前を通りかかったとき、ふいに優しげな声が椎菜に降りかかる。椎菜は仁人かと思い、一度振り返るが、そこには誰もいない。淡い期待だったと落ち込みながら、前を向こうとした時、先ほどの声の主が目の前に現れる。

「えっ!？」

「やあ」

光義は軽く手を挙げて、笑顔を浮かべて挨拶する。椎菜はやや驚きながらも、なんとか笑顔を取り繕うとする。

「どうかしたのか？」

「いえ……」

光義はもう一度、優しく微笑みかけて問いかける。椎菜はいまいな笑みを浮かべるのが精一杯である。

「悲しそうな顔をしている。そんな顔は君には似合わないよ」

齒の浮きそうなセリフも光義が言えば、様になるので世の中不公平である。そして、人は弱っている時、人の優しさにとことん弱い。椎菜は光義に裏があるのかもと思いつつも、その胸に抱きついてしまう。

「うっ、ううう……」

言葉にならない嗚咽が押し付けられた光義の胸板から漏れ出る。

光義は何も言わずに、そつとその髪を撫で梳く。撫でられるたびに、サイドポニーが小さく揺れ動く。落ち着くまで光義は胸を椎菜に貸す。

しばらくすると、目元を少し赤くした椎菜がゆっくり光義から離れる。それに合わせて、光義も頭を撫でるのを止める。

「すみませんでした」

「これぐらい構わないさ」

腫れた瞼をこすりながら、椎菜は光義に頭を下げる。

「少しは落ち着いたかい？」

「おかげさまで……」

光義が優しい笑顔を向けると、椎菜は少し照れたように顔を反らす。

「構わないよ、これくらい。よろこんで受けさせてもらうさ」

光義の言葉を聞いて、椎菜は恥ずかしさがさらにこみ上げてくる。顔を真っ赤にしてもう光義の顔を直視することができない。

「何があったか知らないが、どうだい、これから気分転換でもしないか？」

「え？」

「塞ぎこんでいる気持ちの時は何をやってもダメなものさ。そういう時は何か楽しいことでもして気分転換するのが一番なのさ」

光義の白い歯が輝いているように見える。椎菜はその精悍な顔をしばらくぼうつと眺めてしまう。

あれ、先輩ってこんなに……

椎菜の心の片隅で何かが小さな、とても小さな音を立てる。

「みつが丘の駅前においしい紅茶を出す店を知っている。そこはケーキも絶品だ。甘いものには人を幸せにする魔法がかかっているんだよ。どうだい？」

優しい笑顔を浮かべたまま、光義は椎菜に手を差し伸べる。椎菜はその手のひらをしばらく見つめてから、そつと手を重ねる。

仁人が学校から出てきた頃には夕陽が町を赤く染めていた。図書館の長い影が坂まで伸びている。自転車を押しながら歩く人影が沿うように一本長く伸びる。制服にコート姿の仁人は相変わらず左肩にスポーツバッグをかけている。

ずっと部屋にいるわけにもいかなないので、出てきた方がいいが、そのまま帰る気分にもなれずに駅前商店街でもぶらつこうかと考える。自転車を押したまま坂を下り、歩いて商店街まで赴く。

「この辺に来るのも久々かもしれない」

高城市の商店街ほど立派ではないが、基本的な物はなんでも揃えられる。夕暮れ時ということもあり、夕食の買出しをする主婦から学校帰りの高校生までさまざまな人が行き交う。仁人も自転車を押したまま、その渦へと飲まれるようにクリスマスカラーに彩られた商店街に入っていく。

商店に入る事もせず、人の流れに身を任せて仁人は商店街を歩く。止まっているとさまざまなことを考えてしまうが、こうやって動いていると少しでも考えないで済む。そう思って、仁人は人にぶつからないように気をつけながら、クリスマススムードに包まれた商店街をぼんやりと徘徊する。

気付くと、商店街を通り抜けて駅前に出てきていた。イルミネーションを施された時計台では数人が寒い中、待ち人を今か今かと待ち焦がれている。仁人はあの日、椎菜や貴土のみんなで映画に行った時のことをふいに思い出す。

胸に締め付けられるような苦しみを覚え、仁人はコートの胸元を握り締める。胸の痛みは治まるどころか増すばかりである。

「僕は……」

仁人は自転車を止めて、時計台の下にあるベンチに腰かける。しばらく駅前を歩き交う人々をぼんやりと眺める。帰宅を急ぐサラリーマンや数人で塾へと向かう小学生、星鈴高校の制服を着ているカップルなど、行く人や戻ってくる人が入り混じる。

「えっ!？」

仁人は驚く。行き交う人々の中に見知った顔、見ていたいけど今は見たくない顔と見覚えがあるだけの顔を見つけてしまう。一瞬、幻覚かと疑い、目を擦ってみるが、それは悲しくも現実であった。椎菜と光義が楽しそうに笑って話しながら、駅前にある小洒落た喫茶店から出てくる。

仁人は自分の眼を疑うことなく、淡々と事実を見届ける。正確には、頭の中が真っ白になって、何も考えられないだけである。憤りも悲しみも生まれない。ただ歩いてくる二人から目が離せない。自分が息をしているのか、心臓が動いているかも分からない。

「とってもおいしかったです。同じ茶葉でも淹れ方とかで違いが出るんですね」

「紅茶はとっても奥が深いからね」

椎菜と光義の会話がかすかに風に乗って聞こえてくる。仁人には声としてではなく、音として耳に届く。

「椎菜……」

二人の姿がはっきり見えるようになって、ようやく仁人は言葉を漏らす。そこで初めて、椎菜は仁人の存在に気付く。

「仁人……?」

しばらく二人は見つめ合って、動かなくなる。お互いに自分がどんな顔をしているのか分からない。相手の表情だけで頭の中が埋め尽くされる。

「っ!？」

突然、仁人は立ち上がると、脇に置いてあった自転車に跨り、商店街のほうに走り去る。人にぶつかりそうになりながら全速力で。

「きみひ——」

走り出す仁人を呼び止めようとして、椎菜は名前を呼ぼうとするが、途中で声にならないで途切れる。

「彼はいったい?」

光義は小さくなる自転車を眺め、尋ねながら椎菜のほうを向く。

椎菜の表情を見て、光義は悟る。それがどれだけ愚問であったか。

「先輩、すみません」

椎菜はそれだけ言い残して、商店街とは反対側に歩いていく。光義は何も言えずにその後ろ姿を見送る。

「ああ、また振られてしまった……」

沈む夕陽が町を暗闇へと誘い、街灯がそれに抵抗する。笑っているかのような細い三日月が澄んだ空に輝く。遠くでかすかにクリスマスソングが寂しげに流れている。

仁人は気付くと、自室のベッドで天井を眺めていた。どういう道筋で帰って来たかも、いつ帰って来たかも覚えていない。ただ椎菜が楽しげに光義と歩いていた姿だけがリフレインされる。そのたびに胸が強烈に締め付けられる。

ああ、椎菜を笑顔にできるのは僕じゃなかったんだ。あの人、確かに生徒会長の光義先輩だよなあ。彼が椎菜を笑顔にしてくれるんだ……なのに、なんでこんなにやるせない気持ちなんだろう。椎菜は笑っているのが一番かわいい。その笑顔にしてくれる人がいるってのに、どうしてこんなにも悲しくて、苦しくて、悔しくて、寂しい。僕は……僕は……

仁人は訳が分からなくなつて、胸に痞えているものを吐き出した、喚き散らしたい衝動に駆られる。でも、なんて叫べばいいかも分からず、衝動を胸に押さえ込む。余計に胸にモヤモヤが溜まって、苦しみが増す。痛みに耐えるように身体を丸める。

「椎菜……」

少しでも胸に痞えているものを吐き出そうと、小さくまるで助けを請うようなつぶやきを漏らす。

マナーモードの携帯電話が振動でベッドから落ちて、仁人は電話がかかってきていることに気付く。あまり出る気はしないが、緊急の連絡だと困るので拾い上げて通話ボタンを押す。

「はい、宮前です」

『俺、俺。オレオレ詐欺です』

仁人は一瞬で終話ボタンを押す。次の瞬間、また電話がかかってきたので、通話ボタンを押す。

『いきなり切ることはないだろ』

貴士の抗議の声が受話器から上がる。

「悪いが、今はそんな気分じゃない」

『んなことは分かっている。だからこそ、じゃないか』

口調こそ変わらないが、貴士の声が一気に真剣味を帯びたものへと変わる。

『いろいろと言うべきことや言いたいことはある。だが、俺はあえて言わない。言う必要がないからな。そうだろ？』

仁人はしばらく考えてから気付く。先ほどまでのどうしようもない気持ち薄れて、少し冷静になれているのに。

「ああ」

『だから、一言だけ。お前はお前のやりたいことをやりたいようにやれ。ごちゃごちゃ考える必要なんてない』

「それ、今の状況に合っているか？」

『俺が言える唯一の言葉だからな』

「ありがとう」

『俺には似合わない言葉だな』

貴士が照れ臭そうに吐き捨てる。そうして、静かに通話は終わり、仁人は携帯電話を机の上に置く。

別に気分は爽快にはなっていない。考えもまとまったわけではない。さっきと何一つ状況は変わっていない。なのに、仁人の胸にあったモヤモヤは晴れていた。体がバラバラになりそうな胸の痛みも治まっている。椎菜を思うとまだ苦しくなるが、それは先ほどのとは違うことに仁人は気付いている。

「僕は……椎菜のことが好きなんだ」

初めて実際に言葉にしてみた自身の想い。それは思った以上に確

固たる意志が感じられる口調で紡がれた。

付き合う資格があるか、資格ってのは何なのか、まだ分からないけど、この想いだけは、好きって気持ちだけは本当だと思う。今はそれでいいじゃないか。

仁人は立ち上がり、本棚の楯を眺める。初めての楯、いい意味でも悪い意味でも思い出深い品。まだ過去を振り切れたわけではないけど、少なくとも前には進めるようになったような気がした。

駅前から少し遠回りして帰って来た椎菜は家族団欒の夕食を無言で終え、両親に心配されながらも「大丈夫だから」と言い張り、風呂場へと消えていった。

たっぷりのお湯が張られたバスタブに体のほとんどを沈めた椎菜はあの時の仁人の表情を思い出して、さらに顔を半分ほど水面に沈める。頬には汗か涙か分からない滴が流れる。

仁人のあんな顔、初めて見た。思い出すだけで胸が苦しい、切ない、悲しい、痛い。もう私のバカ。バカバカ、バカ。なんで先輩とお茶なんて行っちゃうかな……そりゃ、確かにあの時は先輩のことがかつこよく思えたけど……けど、私はあんな仁人なんて見たくないよ。もう諦めちゃおうかと思っていたけど、あんな表情見ちゃったら諦められないよ。

「あんな表情の仁人なんて……もう二度と見たくない」

沈めていた顔を上げて、小さくつぶやく。頬を伝う滴を軽く払いのける。椎菜の表情が少し引き締まったものへと変わる。

「だって、私、やっぱり仁人のことが好きなんだもん」

盛大にお湯を撒き散らしながら立ち上がった椎菜は誰に対して分からない宣言を、膨らみが少し足りない胸を張りながら握りこぶしを作って宣言する。

「でも、やっぱり、仁人はまだ資格がないって言うのかなあ……」
また肩まで体をバスタブに沈めて、椎菜は悲しげに呟く。先ほど

までの勢いはどこに消えてしまったのだろうか。

やっぱり今回もダメなのかな……あれだけ強く言っちゃったら、誰でも嫌いになるよね。一方的に想いを告げるだけ告げて、向こうの話を聞かないなんて。でも、私は仁人が好きなんだよ。

「大好きなんだよ……」

はち切れんばかりの切なさが胸に広がり、椎菜は締めつけられるような痛みを覚えて、もう少し大きくなれと思う乳房を両手で優しく包む。

月明かりもほとんど射さない室内に清水は静かに微動だにせず立ち続けている。ソファに長身の体を寝そべらせて、光義は腕で目を覆っている。そうしていないと、堪えられそうにないからである。

「俺はまた振られたのか……」

うわごとのような呟きに清水は反応しない。メイドは求められたこと、求められることしかない。

「分かっていた。分かっていたさ。彼女が夢中だったことは。でも、あの男は彼女を拒否していたんだ。俺にもチャンスはあったはずだった。今日だって、途中までは上手く行った。彼さえあの場にいなかったら……」

光義の独り言が木霊する。それは悲しげなワルツのような響きである。

「で、光義様はどうなさるおつもりで？」

「言われなくても分かっている、清水。俺は好きになった女の幸せを願うまでだ。それが俺にできること、していいことだから」

清水は頷きもせず、ずっと光義の側に立ち続ける。光義が眠りにつくまでずっと。

第四章

明けない夜はないとは誰が言った言葉だろうか。どんな事が起きようとも、太陽が昇ってくれば朝になる。そして、朝になると、学生たちは登校しなくてはならない。

仁人は眠たげに瞼が半分落ちている。欠伸をかみ殺しつつ、スポーツバッグを左肩に自転車を押して坂を登る。今学期も残すところあと一週間を切っている。

「あ、ミヤミヤ」

中庭を歩いていると、後ろから元気いっぱいの声をかけられる。こんな呼び方するのは一人しか知らないので、仁人は少し憂鬱になりながら振り返る。松木が手を振りながら駆け寄ってくる。その後ろには能登と黒松の姿もある。

「おっはよっ！」

「おはようございます」

「よう」

松木、能登、黒松の順番で挨拶してくる。黒松は居心地悪そうに視線を外す。

「ああ、おはよ」

仁人もなんとなくぎこちなく挨拶してしまう。

「あれ？どうしたの、ミヤミヤ。そんなテンションじゃクリスマスはやってこないよ」

一人朝からハイテンションな松木がはしゃいでいる。

「そういえば、もうそろそろクリスマスだな」

「黒松様は、その……何かご予定は？」

能登がさりげなく大胆なことを聞いている。その顔はよく熟れたイチゴのように赤くなっている。黒松まで照れて、赤くなった顔を逸らす。

「そうか、もうそんな時期か……」

仁人はそこで初めて思い出す。思い出したところで、仁人にとっ

てはクリスマスも練習に明け暮れる日々の一日に過ぎない。

「今年は皆でクリスマスパーティーでもしようかと思っていたけど、どうやら皆さん、忙しそうですね」

ニヤニヤと嫌味な笑みを浮かべた松木が能登と黒松を見て楽しそうに呟く。

「ミヤミヤも」

突然、仁人のほうを振り返り、さらに笑みを強める。いきなり振られた仁人は戸惑い、何のことか分からず小首を傾げる。

「あああ、冬だつてのに、私の周りは春ばかり。私の春はいずこ」

そう言いながら、松木は早々と教室へと駆け込む。黒松も別れを告げて、自分の教室へと入っていく。その後ろ姿を能登が名残惜しそうに見つめる。

改めて教室内を見てみると、クリスマスや冬休みのことで溢れていた。クリスマスに彼氏とどこのレストランでディナーするのだの、モテない者同士寂しいクリスマスパーティーをするのだの、冬休みは部活漬けであるだの。誰一人、本分である学業のことなど考えていなかった。

「で、二十四と二十五、どっちにすればいい？」

「何の話だ？」

一限の数学が終わってすぐに貴士は仁人の席にやってきた。

「部活の休み。そうだな、二十五日のほうがいいか」

「両方とも練習って選択肢はないのか？」

「そんなことしたら、暴動が起きるぜ？主に顧問から」

今の男子バスケット部の顧問教師は最近、彼女ができたばかりでクリスマスに向けてかなり気合を入れているとの噂である。

「むしろ、両日休みって選択肢ならあるな」

貴士が冗談まがいには本当に起きかねない未来を予想する。

「それは断固阻止しないと」

年明けには新人大会が待ち構えているこの時期に二日も練習をしないのは致命的である。仁人は諦めて、二十五日を休みにすることに渋々承諾する。

昼休みに貴士が顧問のところに行くと、強く両日休みを押されたが、貴士の巧みな交渉によって、クリスマススイブは練習が決まった。しかし、早めに切り上げるという条件付きだった。

昼休み、椎菜は館長室に籠っていた。昼ご飯も食べずに事務処理に追われている。

「ううう、終わらない」

生徒会と合同で行ったテスト明けの企画の結果報告書を確認しながら、椎菜は泣きそうな声を漏らす。お昼くらいは仁人とゆっくり食べたいと妄想して、朝早くから学校に来て作業しているが、なかなか終わりそうにない。

「誰か、変わってよ」

嘆いたところで誰も変わらないのが館長の仕事である。椎菜が次の書類へと取り掛かったところで、メールを着信する。

「誰だろ？」

書類に伸ばしかけた手を携帯に伸ばす。メールは珍しく貴士からであった。

『クリスマスが間近に迫ったこの時期、いかかがお過ごしかな？館長の仕事で手一杯？そんな貴女にホットでクールな情報をお届けだ。星鈴高校男子バスケット部は二十五日、部活が休みだ。以上、クールガイ貴士のナイス情報でした。あとはがんばれよ』

「そっか、クリスマスは休みなんだ。そういえば、二十六日って……」

椎菜は嬉しそうに弾んだ声をあげて、壁のカレンダーを眺める。そして、そっと二十五の数字を赤ペンで囲む。

放課後になるとすぐに、昨日の遅れを取り戻す勢いの気迫で仁人は体育館へと駆けた。部員がまだ集まらない頃から練習を始めて、部活が開始されてからも気合の入ったプレイを披露して、他の部員がヘトヘトになっても一人だけは元気だった。

「よし、もう一本！」

「タンマ、タンマ。もう無理だったの」

仁人の叫び声に肩で息した貴士が待ったをかける。体育館の外は暗くなっており、お隣の女子新体操部の姿もなくなっている。

「もう勘弁してくれ」

床に座り込んだ羽多野が弱音を上げる。それに他の部員も同調し始める。

「つうわけだ。もう遅いし、終わりにしよう」

「ふう、そうだな」

周りの様子に気付いた仁人はようやく部活を終了する。部員たちはぞろぞろと疲れの見える足取りで部室のほうへと歩いていく。普段、居残り練習するメンバーも今日ばかりは中止のようだ。

「さあ、帰ろうぜ」

「いや、俺はもう少し練習してから帰るよ」

「お好きにどうぞ」

貴士もさすがに付き合い切れないと片手をヒラヒラされて、部室のほうへと歩いていく。

一人コートに残った仁人は皆が帰ってから一時間ほどシュートフォームの確認やレイアップのパターンの練習を行った。

練習を終えて体育館から出た時には、もう学内にはほとんど人がいなかった。鍵を返しに行くと、宿直の教師から嫌な顔されるほどだった。

暗い駐輪所から一つ残った自転車を取り出して、疲労感が漂う足取りで校門のほうへと歩いていく。

「お疲れ様」

「えっ!？」

校門の脇に一本だけ立っている街灯の下から声をかけられる。驚き、目を凝らすと、椎菜が笑顔で手を振っている。

「椎菜？」

「うん。遅くまでお疲れ様」

澄んだ空に瞬く星に負けなくらい輝かしい椎菜の笑顔を見て、仁人は少し疲れが吹っ飛んだ気がした。

椎菜が仁人の隣に近付いてくるので、仁人は右肩にスポーツバッグをかけ直す。手が触れるか触れないかの距離で二人は並んで歩き始めるが、お互いに無言である。勢いでこうなってしまったが、さすがに昨日あんなことがあったばかりで何を話せばいいかお互いに困る。

「え、えっと……星、綺麗だね」

「空気が澄んでいるからよく見えるんだよ」

「へえ」

世間話から切り込んでみるも、すぐに会話は終了してしまう。

「ねえ、仁人」

「ん？」

坂を半分以上下りたところで、このままではダメだと椎菜が覚悟を決める。大きく深呼吸を一回挟んで続ける。

「クリスマスって空いてる？」

暗闇で分からないが、椎菜は耳まで真っ赤になっている。仁人も椎菜が何を言い出そうとしているのか悟って、赤く染めた頬をかく。

「二十五日は部活が休みになった」

仁人は照れを隠すようにそっぽ向いて答える。

「じゃ、じゃあさ、私とデートしよう！」

仁人の前に出て、椎菜が叫ぶ。最高潮に真っ赤になっている。『好き』って言う以上の恥ずかしさがこみ上げてくる。今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。

足を止めた仁人は予想していた展開とはいえ、戸惑ってしまう。断る理由はない。椎菜のことも好きだ。でも、まだ自分には資格があるのかどうか答えが出ていない。それに昨日のこともある。

「僕は……」

「デートするのに資格なんて関係ないでしょ？」

「そうだけど……」

「じゃあ、いいでしょ。それとも、私とデートするの嫌なの？」

「それはない！」

悲しい笑みを浮かべる椎菜に仁人は全力で否定する。あまりの声の大きさに椎菜は少しびっくりしてしまう。

「ごめん……」

何に對してか分からない謝辞を述べて、仁人は頭を下げる。

「ねえ、もしかして、昨日の事を怒っているの？」

「怒る資格なんて、それこそ僕にはないよ」

仁人が歩き始めるので、椎菜もその隣を歩いていく。しかし、距離は先ほどより少しだけ離れている。

「あれは、その……」

椎菜はなんて説明したらいいか分からず、口ごもってしまう。仁人に振られた悲しみで光義の優しさが少し沁みた、なんて本当のことを言えるはずもない。

「なんて言えば分からないけど、これだけは本当。私は仁人のことが好き。私が好きなのは仁人だけだから」

椎菜は昨日のことで再認識したあふれんばかりの想いをぶつける。必死の想いは必ず届くと信じて。

「ありがとう」

仁人はたったそれだけを呟く。少し嬉しそうで、照れ臭そうなあまいな笑みを浮かべながら。

「うん、大好き、仁人」

涙が溢れそうになるのを我慢して、椎菜は最高の笑顔をする。涙目でぐちゃぐちゃになりかけているが、仁人には女神をも凌駕する

笑顔だった。

それからずっと椎菜は強引にデートに誘ったが、仁人は曖昧に返事するだけだった。別れる時、椎菜が若干むくれながら悔しそうな表情を浮かべていたのが微笑ましかった。それに負けて、最後に仁人はクリスマススの日にデートすることを約束した。椎菜は極上の笑顔で何度も頷き、嬉しそうにずっと手を振って別れた。仁人はクリスマスに椎菜と、好きな人と過ごせることを素直に嬉しく思う。

星鈴高校はなんの変哲もなく終業式を向かえ、冬休みへと突入した。仁人をはじめとする男子バスケット部はさらに練習に熱が入る。図書館も年末進行で館長の椎菜は体がもう三つくらい欲しいと思うほど忙しい。休日返上で業務をこなしても追いつかない。

忙殺されそうな日々でもこの日ばかりは皆、そわそわしてしまう。十二月二十四日、クリスマススイブ。この日もバスケット部は体育館でコートを駆け巡っている。

「今の動きはよかった」

「よっしゃ」

ポストプレイからゴールをもぎ取った羽多野がガッツポーズをして喜ぶ。

「じゃあ、ちょっと休憩にするか？」

人差し指の上でボールを回している貴士が合図すると、部員たちは水分補給を行ったり、その場にへたり込んだりして、体力回復に努める。

「はい」

「おっ、サンキュ」

仁人が投げたスポーツドリンクのペットボトルを受け取り、貴士は一気に飲み干す。

「クリスマススイブだったのに、全員参加とはねえ。皆、寂しい独り身なのか、明日を休みにした効果なのか」

「後者であって欲しい。せっかく休みにしたんだから」

「だな」

貴士は横目で体育館の端を盗み見る。顧問が携帯電話と情報誌を駆使して、今日のデートプランに躍起になっていた。

「宮前 仁人はいますか？」

体育館に淡々とした声が響き渡る。思い思いに休んでいたバスケット部員がその声の主の方、体育館の入口へと視線を馳せる。

「僕ですが」

仁人はおずおずと手を挙げて、その人物に近付く。左腕に生徒会の腕章をしているので、生徒会役員である事が伺える。

「私は生徒会副会長の後藤 美夏です。少し来ていただけますか」

後藤は有無を言わせぬ口調で仁人に迫る。睨むようなキツイ視線が印象的である。

「分かりました。貴士、あとは頼んだ」

「ああ、お気をつけて」

何の用だろうと疑問に思いながら、仁人は後藤の後について体育館から出て行く。扉が閉まってから、コートにざわめきが戻る。貴士は困惑顔でその扉を見つめる。

後藤に連れてこられたのは御殿ではなく、教室棟校舎の屋上だった。どんよりと低い空が微量の眩しさで迎えてくれる。

「では、私はこれで」

扉を開けた後藤はそのまま下がり、私の役目はここまでだと仁人に道を譲る。仁人は不可解に思いながらも扉を抜けて、寒空の下に出る。

「やあ、待っていたよ」

フェンスにもたれていた長身の男が待ちくたびれたとばかりに屈強な体を起こす。左腕には生徒会の腕章をしている。精悍な顔つきに知的な長方形のメガネ。仁人はその男を当然知っている。

「生徒会長……」

「以外だったか？」

光義はおどけたような表情を浮かべる。仁人は少し強い視線で光義を見つめる。

「いえ、何の用ですか？」

「そんな警戒しなくてもいい。ちょっとした個人的な用件さ」
そう言って、光義は腕章を外してポケットに仕舞う。

「君は明日、椎菜くんとクリスマスデートをするようだね」
「っ!？」

驚く仁人のことなど気にもせず、光義は続ける。

「だが、君はまだ迷っている。違うか？」

光義の鋭い視線に射抜かれる。仁人は何も言えずに怯む。

「彼女の告白を何度も拒んでいる。君が何を考えて拒んでいるのか分からないが、君も彼女の事が好きなんだろ？」

光義の指摘に仁人はたじろぐ。その様子を見て、光義は確信を強める。

「じゃあ、素直になったらどうだ」

「僕は……」

「俺は椎菜のことが好きだ」

困惑していた仁人の顔が一瞬に驚愕の表情に切り替わる。光義は真剣な眼差しで仁人を見据える。

「まあ、振られてしまったがね。彼女は俺じゃなく君を選んだ」

そして、柔和な笑みを浮かべる。その笑顔がなんだか寂しそうでと仁人は感じる。

「これは同じ女を好きになった者からのお願いだ。彼女を幸せにさせてやってくれ。頼む」

光義が直角に近い角度まで頭を下げる。横柄な態度で物事にあたる光義が初めて素直に頭を下げる。その光景に仁人は衝撃を覚えると同時に、そこまで光義が椎菜のことを好きであることを思い知らされる。

「先輩……」

「さあ、ここまでしてやったんだ。後は知らん。まだ君が拒むというのなら、俺は今度こそ本気で彼女を物にする。本気で愛する！」
頭を上げた光義はメガネを直して、仁人を睨むように見つめる。
その視線は挑戦的でありながらも、どこか優しさを感じる。

「ふ、話は以上だ」

光義は腕章を取り出して腕にはめると、仁人に背を向けてフェンスの向こうにある図書館を眺める。仁人はその背中に静かに「失礼します」と声かけて、そっと屋上をあとにした。

仁人がいなくなってからしばらくして、屋上に一人残った光義に人影が近付く。

「会長……」

「これでいいんだ。俺の役割はこれで……」

そっと寄り添ってきた後藤のことを気にもせず、光義は揺らいで見える図書館をただ眺め続けた。

クリスマスイブということで早い目に切り上げられた部活から帰った仁人は妹がゲームで対戦しようとすがってくるのを払いのけて、すぐに自室へと引き下がった。左肩からスポーツバッグを下ろして、部屋着に着替えてからベッドに倒れこむ。

「はあ」

浮かない表情で大きなため息を吐き出して、天井を見つめる。昼間、光義に呼び出されて言われた言葉を思い出す。

先輩も椎菜のことが好きだった……あんなに真剣にお願いされたのは初めてだ。僕に椎菜を幸せにすることができのだろうか。僕に椎菜を笑顔にすることができのだろうか。僕には資格がない……じゃあ、資格ってなんだ？常に相手できることが資格では……ないとは思える。バスケが忙しいってのは単なる言い訳でしか、逃げでしかない。今ならそう思える。

「資格……恋する資格って……」

その時、ふと光義の言葉が蘇ってくる。

『本気で愛する！』

仁人の頭の中で、今までさまざまな人に言われた言葉が渦巻く。

貴士にされた指摘、黒松からの激励、光義に掛けられた発破、椎菜の想い。

「僕は……」

仁人は頭を抱えて悩み、考え、そして、ある一つの結論に至る。

「僕は資格がないかもしれない……でも、椎菜のことが好き！」

仁人の顔が清々しく、決意を秘めた、迷いのないものになった。
た。

資格があるか自信はないけど、大丈夫。これなら、この資格なら僕にでもできる。そうなんだ、これでいいんだよ。ようやく僕は本当に前に進めたんだ。

仁人は本棚の楯をじっと見つめる。そして、小さく呟く。

「ありがとう」

優しい笑顔を浮かべながら。

仁人が晴れ晴れした気持ちで明後日以降の練習メニューを考えていると、携帯電話がメールの着信を知らせてくる。

「誰からだ？」

本を一旦閉じて、振動が止まった携帯電話を持ち上げて確認する。
貴士からであった。

『お前のことだから、明日の予定なんて考えてないだろうから代わりに考えといたぜ。この通り行動しろとは言わんからちょっとは参考にしろよ』

時間と行き場所が書かれたクリスマスデートのタイムスケジュールがみっちりと書かれたファイルが添付されていた。

「貴士……ありがとう」

一通り目を通した仁人は小さく感謝を述べる。女の子受けしそうな、それでいて、高校生らしくお金のあまりかからないデートプランであった。

もう一度、プランを確認していると、貴士から新たなメールが来る。

『ついでだ、晩飯のレストランだけは手配しといてやる。これは俺サンタからのクリスマスプレゼントだ。気にするな』

下にはレストランの詳細が添えられている。

「あいつには頭が上がらないな」

仁人は簡素に一言だけ返信する。表しきれない気持ちを込めて『ありがとう』と。

十二月二十五日、クリスマス。イエス・キリストの誕生日とされているが、一説では違うと言われている。日本においては、そんなことよりも恋人の日という認識が強い。恋人がいない者にとっては平日となんら変わらない日である。

仁人はどんよりと曇った空、冷たい風が吹く高城駅のホームに降り立つ。待ち合わせ時間までまだ三十分以上余裕がある。にもかかわらず、仁人はそわそわして落ち着かず、予定より早く来てしまった。

「あれ？ 仁人？」

「え？ 椎菜？」

改札を出ようとしたところで、ホームの反対側から来る椎菜とばったり出くわす。普段サイドポニーにしている髪を前と同じ白のモコモコベレー帽に収め、後ろに大き目のリボンとティアードレースをあしらったブラウンのプリンセスコート、赤チェックのミニスカートから覗く脚はモノクロボーダーハイソックスに包まれ、黒のハーフブーツで足元をきめている椎菜が緩く巻いたマフラーを揺らして、笑顔で飛び跳ねながら駆け寄ってくる。あまりの可愛さに仁人はし

ばし見惚れてしまう。

「もしかして、仁人も落ち着かなくて早く来ちゃった？」

「……あ、ああ。えっと、そんなところ」

「そっか……実は、私もなんだ。気が合っちゃったね」

照れ臭そうにする仁人と嬉しそうに微笑む椎菜は並んで自動改札を通り抜ける。駅構内から出ると、大きなクリスマスツリーが迎えてくれる。周りの店もクリスマス仕様に変わっており、クリスマスケーキを売り込む声がクリスマスソングに乗って聞こえてくる。

「さすがクリスマス。人が多いね」

「うん」

「しかも、カップルばかり」

「そうだね……」

「私たちも、その……恋人同士に見られちゃってるのかな？」

少し頬を赤く染めながら、椎菜がそっと寄り添ってきて腕を絡めて手を繋いでくる。仁人は何も答えられず腕に緊張が走る。

「い、行こうか」

「うん」

ようやく出た仁人の声は上ずっていたが、椎菜は気にせず嬉しそうに頷き、さらに身を寄せる。仁人はできるだけ腕に意識がいかないうちに心がけて、ゆっくりと椎菜の歩幅に合わせるように歩き出す。

駅前のロータリーからバスに乗り、海沿いにある小さな水族館へ向かう。混雑する車中、仁人と椎菜はほとんど抱き合うような体勢で立っていた。お互いに何も喋れず、無言のまま顔を赤くしていた。目的のバス停に着く十数分がとても長く感じられた。

バスから降りて、ようやく解放された二人はまともにお互いの顔を見られないようになっていた。火照った身体に海風が若干心地よく感じられる。それでも、お互いの手はがっちり握られている。

「やっぱり、人ごみは好きになれない」

「そうだね……」

何かを紛らわすように仁人が呟き、椎菜がそれに同意する。二人はまた腕を組んで建物へと入っていく。

中に入ると、大規模な水槽や展示こそないが、数多くのアクアリウムが色とりどりにライトアップされており、幻想的な雰囲気醸し出している。あまり知られていないので、人もまばらにしかない。

「きれい……」

椎菜は入るとすぐに尾柄部が赤くキラキラしたスポットがあるホタル・テトラのアクアリウムに近寄り、キラキラした眼で水槽の中を覗き込む。仁人も隣で同じように精密機械のような泳ぎ方をするホタル・テトラを目で追いかける。

「こんなの初めてだよ」

ミナミヌマエビやスカーレット・ジェム、グッピーのアクアリウムを鑑賞して、椎菜は少し興奮気味に声を漏らす。仁人も幻惑なアクアリウムと楽しそうな椎菜に魅せられている。心の中で改めて貴士にお礼を言う。

「ねえねえ、仁人。これ、かわいい」

「ホントだ」

側面に不連続な黒いラインがあるコリドラス・コチュイを指差して、椎菜が嬉しそうに仁人の腕を引っ張る。

「なんか、仁人に似ているね」

「そうかなあ」

仁人は照れながら、もう一度水槽の中を覗き込む。コチュイが小さな体で水槽の中を優雅に泳いでいる。仁人にはどの辺りが似ているのかさっぱり分からなかった。けど、椎菜の楽しげに水槽を突いている姿を見ると、そんなことはどうでもよくなってくる。

アクアリウムを堪能した二人はまたバスに揺られて、駅前まで戻ってくる。今回は空いていたので座る事ができた。雲の合間、沈み行く夕陽がバスの窓から見えた。

「イルミネーションが綺麗……」

「ホント綺麗だ」

駅前の大きなツリーを中心に駅前全体がイルミネートされている。

「こんなの初めてかも……まるで空から光が降り注いでいるみたい……」

駅舎の壁や街路樹、ツリーに取り付けられたLED電球が赤、白、青、黄色と次々に色を変えてキラキラと街を彩る。時には不規則に、時には規則的に輝く光が道行く人々の視線を引き寄せる。

うっとりした表情でイルミネーションを眺める椎菜の隣で、仁人も同じように光の幻想の虜になる。毎年見ているはずなのに、今年のはより一層綺麗に輝いているように感じる。それは電飾が豪華になったからか、隣にいる人のおかげなのか。

歩行者天国となっている大通りもイルミネーションが眩き、見る人を魅了している。そのため、ちょっとした人の渋滞ができている。しかし、人ごみが好きじゃない二人は魅入られたようにその渦の流れに飲み込まれていく。

「さっきのアクアリウムも幻想的で素敵だったけど、このイルミネーションも好きだな。これも隣に仁人がいるからかな」

輝く光の桃源郷で椎菜は小さく眩き、寄り添う仁人の腕をさらに引き寄せて、繋いだ手の力を少し強める。それに合わせるように仁人も握り返す。お互いの体温が冷たい手を温める。

大通りのイルミネーションを通り抜け、前に来た映画館の入ったショッピングモールの近くまでやってくる。仁人が腕時計を確認すると、まだ予約時間まで余裕があったので、ショッピングモール内で時間を潰す事にする。

ショッピングモール入ってすぐのホールでは巨大なクリスマスツリーが煌びやかに出迎えてくれる。各テナントがそれぞれクリスマスカラーに彩られ、イーजीリスニングのクリスマスソングが気分を盛り上げてくる。

「すごい大きい。ねえねえ、写真取らない？」

はしゃいだ椎菜が仁人の腕を引っ張りながら、携帯電話を取り出してくる。クリスマスツリーをバッグに仁人と椎菜は並ぶ。

「ダメ、もっと近付かないと入らないよ」

椎菜は携帯電話を掲げて、顔をぐっと仁人に近づける。もうほとんど頬と頬が触れ合うような、少し横を向くだけで唇がそのほっぺたに触れてしまいそうな距離。仁人の心臓は最高潮に活発化する。椎菜に音が聞こえてしまうかもしれないと心配になる。しかし、椎菜も大胆に行動してはいるが、似たような状況であった。

「はい、撮るよ。チーズ」

小さなシャッター音が雑音の中に混ざる。

「もう一枚」

ふたたびシャッター音がかすかに聞こえ、頬にかすかな温かさを仁人は感じる。気のせいかと横を見るが、椎菜は頬を赤く染めて撮った写真を確認している。

「うん、キレイに撮れてる」

二枚目の写真を見て、椎菜は頬の色を強める。そして、大切に保存して、携帯電話を鞆にしまう。ふと不思議そうな顔をしている仁人を横目で見て、耳まで真っ赤にする。

ショッピングモール内を適当にぶらつく。シルバーアクセサリーの店に立ち寄る。リングを中心にさまざまなアクセサリーがケースに入って展示されている。

「素敵」

一つのリングに椎菜の視線が釘付けになる。淡いラベンダーに似

ているピンクをした小さな石がついたステラ・リングである。

「いらっしやいませ。どうですか、お客様」

「うん、すつごく素敵」

近寄ってきた女性店員の営業スマイルに椎菜は純真な笑顔を返す。「その石はクンツァイトと言いまして、宝石言葉は愛の予感、無限の愛です。お客様には大変お似合いだと思いますよ」

店員は椎菜と仁人の顔を見て、小さく微笑む。なんだか二人とも急に恥ずかしくなって、お互いにそっぽを向いてしまう。その様子がさらに店員の笑みを誘う。

店員と雑談を交わしている椎菜を見て、仁人は一つ重大なことを思い出す。クリスマスプレゼントを用意していないことを。

「ううう、でも、高いなあ」

「そうですか、じゃあ、こんな素敵な夜です。特別に一割引にいたしますよ」

「椎菜、買ってあげようか？」

「え？」

悩み顔だった椎菜が驚いて、仁人のほうを振り向く。

「でも……」

「実を言うと、クリスマスプレゼントを用意できていないんだ。だから、クリスマスプレゼントってことで。ダメかな？」

イタズラがばれた子供のようにバツの悪そうな笑みを浮かべる。

「ホントいいの？」

「うん」

「じゃあ、お願いしちゃおうかな……」

遠慮が見え隠れするが、心底嬉しそうに椎菜は笑顔を覗かせる。

「いい彼氏ですね。羨ましいです」

「そ、そんな……」

「うう……」

店員の言葉に二人とも耳まで真っ赤にして俯いてしまう。そんなウブな二人を微笑ましく思いながら、店員はステラ・リングを取り

出し箱に積めて包装してくれる。

「はい、どうぞ」

仁人はキレイに包装された小箱を店員から受け取り、代金を支払う。そうして、その小箱を椎菜に渡そうとしたら、断れた。

「まゝだ。プレゼント交換はもうちょっと先で。ね？」

「分かった」

仁人はそつとその小箱を大切に右ポケットに入れる。

レストランの予約時間が近付いてきたので、ショッピングモールをあとにしてレストランが入っている建物を探す。貴士からのメールを頼りに歩いていくと、すぐにそれは見つかった。

高級そうな外観の玄関を構えた何階まであるか分からないほどの高層建築。貴士が予約したレストランはその最上階とまではいかないが、かなり上のほうにあった。

「すぐごく高級そうだけど、大丈夫？」

「大丈夫……きつと」

若干不安になりながらも、仁人たちはエレベーターに乗り込み目的の階を目指す。エレベーターから降りると、見るからに高級そうなイタリアンレストランがフロアの一角に門を構えていた。仁人は内心焦りまくり、財布の中身を必死に思い出そうとする。

「本当にここで合ってる、よね？」

「間違っていない……はず」

椎菜もさすがに不安が嬉しさよりも大きくなる。

「ご予約の宮前様でしょうか？」

「え？はい」

入口付近で戸惑っていると、突然ボーイらしき人に声をかけられる。

「伺っております。どうぞこちらへ」

案内されるがまま店内へと入って行き、窓際の席に辿り着く。テ

ーブルには特別予約席のプレートがあった。

「こちらになります」

「はい」

上着をボーイに預けてから椎菜の対面席に着いて、改めて凄いとこに来てしまったと仁人は思う。ガラス張りにされた窓からは高城市が一望できる。駅前から大通りにかけてのイルミネーション、それに負けないほどの輝かしい夜景。どんよりとした雲が空を覆っているので、月や星は見えないのが残念である。

「すごい……」

椎菜が思わず声を漏らしてしまう。今日一日でいくつもの感動的なものを見てきたが、これはそれらに勝るともけっして劣らない。

「ほんとだ」

仁人も一時的にその感動的な風景に心を奪われる。

「失礼します」

ウェイトレスがお冷を運んでくる。しかし、メニューらしきものは何も渡してこない。疑問に思った仁人はそっと小声でウェイトレスに尋ねる。

「あの、メニューは？」

「はい、お客様は特別コースでご予約されておりますので、こちらでコース料理を順番に出させていただきます」

「え？じゃあ、料金は……」

「お会計は二人合わせて五千円となります」

思った以上にリーズナブルな値段に仁人は一安心する。きつとうにか貴士が裏で話をつけてくれているのだろう。

「それでは、失礼します」

ウェイトレスはきつちりと頭を下げると、きびきびした動きで立ち去っていく。

「こんなクリスマス、初めて。ううん、こんな素敵な日が初めてだよ。ありがとう、仁人」

「お礼を言うのは僕の方だよ。椎菜が誘ってくれなかったら、家で

家族と小さなクリスマスケーキを食べて、妹に強制的にゲームさせられていたよ。ありがとう、椎菜」

お互いにお礼を言い合い、微笑み合う。そして、お互いの笑顔に見惚れてしまう。

食前酒アペリティーヴオは未成年なので、ノンアルコールのスパークリングワインが出てきて、前菜アンティパストから始まり、プリモ・ピアット、セコンド・ピアットと順番に出される。どれも絶品の味わいで、椎菜も仁人も大満足だった。デザートの小さなクリスマスケーキで締めくくり、食後酒として紅茶とコーヒーが運ばれてきた。

「こちらはルフナのミルクティーとなります」

「え！？ルフナのミルクティー？」

ルフナ独特の爽やかな香りがほのかに漂ってくる。椎菜はあの上品な甘みを思い出し、恍惚とした表情を浮かべる。

「こちらはエルサルバドル・サンタリタ・ナチュラルのエスプレッソになります」

聞いたこともないコーヒー豆のエスプレッソがそっと仁人の前に置かれる。ウェイトレスは一礼すると、すぐに下がっていく。

「どうかした？」

「ううん。ホント、今日は嘘みたいに素敵な日だって」

カップを小さく傾け、椎菜は極上の笑顔を浮かべる。カップに触れる椎菜の唇に視線を奪われながら、仁人も同じように小さなカップを持ち上げ、深いコクと甘み、ちょっとした苦味に軽い感動を覚える。

「ありがとう、仁人」

眼下の夜景に負けないくらい輝かしい笑顔を浮かべる椎菜に仁人は優しく微笑み返す。この時間がずっと続けばいい思いながら。

ビルから出てきた二人は外気の寒さに震える。自然と距離を縮め

て、ほとんどくつついているような格好で歩く。

「ねえ、最後に行きたいところがあるんだけど……」

「どこ？」

「それは着いてからの秘密」

そう言って、椎菜は絡めた仁人の腕を引くように駅のほうへと歩いていく。仁人は静かにそれについて行く。

電車に乗って高城市からみつが丘に戻ってくる。商店街のイルミネーションを通り抜け、星鈴高校と反対側、みつが丘にある三つの丘のうち、一番高い丘に向かう。夜になりさらに寒くなった中、二人は小一時間ほど歩いて頂上にやってくる。

丘の頂上は見晴台のある小さな公園になっている。夜もだいぶ遅くなっているからか、公園には仁人たち以外誰もいない。

「ようやく着いた」

「ここ？」

「うん、ここからの眺めがすっごく好きなの。さっきの夜景ほどじゃないかもしれないけどね」

少し悔しそうにはにかむ椎菜の言うとおり、ここからはみつが丘全体を一望できた。高城市ほど煌いていないが、それでも自分の町だという補正だろうかキレイに思えてくる。

「僕もなんか好きだな」

「嬉しい」

椎菜は組んでいた腕を放すと、仁人に飛び込むように抱きつく。吐息がかかるくらいの距離まで近付く。仁人は目の前の唇に視線を奪われつつ、抱きしめるように腕を回すべきかどうか悩む。

「あっ、ご、ごめん……」

ずっと仁人から離れた椎菜は大きくなる一方の心音が聞こえないように胸を抱える。つい勢いで抱きついてしまったことを反省する。仁人のがっちりとした胸板の温かさに思い出し、顔を余計に赤くさせる。

「あ、う、うん」

消えた温かみに寂しさを感じながら、仁人は曖昧に返事する。フルスロットルの心臓がうるさいくらい脈動する。恥ずかしさを押し隠しつつ、仁人はそっと椎菜の側に寄り添い、肩に手を回して引き寄せる。

「え!？」

「寒いから。ほら、雪も降ってきた」

目を丸くする椎菜へのよく分からない仁人の言い訳に笑みをこぼしつつ、椎菜は仁人に身を預けるように肩に寄りかかる。

「ホワイトクリスマス……」

粉雪がふわりふわりと舞い降りてくる。二人はしばらく雪振る寒空に生まれた暖かな時間に溺れる。

「そうだ、終わってしまう前に」

二人でぼんやりと夜景を眺めていると、仁人が思い出したように腕時計を確認する。クリスマス終了三十分前だったので、慌てて右ポケットを探る。キレイにラッピングされた小箱を取り出し、椎菜を見つめる。

「メリークリスマス、椎菜」

先ほど買ったステラ・リングの入った小箱を椎菜に差し出す。しかし、椎菜はなかなか受け取ろうとせず、少し何か考える。

「ねえ、一つわがまま言っている?」

「どうぞ。僕にできることなら」

椎菜は少しためらうような仕草を見せてから、何かを決意するよう頷く。

「そ、その……着けて、くれるかな……」

恥らうようにそっぽを向きながら、椎菜はそっと左手を差し出してくる。

「メリークリスマス、お嬢様」

丁寧に包装を外すと、小箱からステラ・リングを取り出して、椎菜のすらっとした指にそっとはめる。夜景のかすかな光を淡いライラックピンクのクンツァイトが反射して輝く。

「うん、メリークリスマス、仁人」

涙で潤んだ瞳で椎菜が全てを魅了する笑顔を浮かべる。今日のアカリムより幻想的で、イルミネーションより魅惑的で、高城市の夜景より綺麗で、みつが丘の風景より温かく、仁人を虜にする。

「これは私からのクリスマスプレゼント」

椎菜は鞆から小さな紙袋を取り出し、仁人に手渡す。

「開けてもいい？」

「どうぞ」

しばらく紙袋を観察した仁人はゆつくりとその封を丁寧に開けていく。中には手袋とマフラー、そしてリストバンドが綺麗に並べられて入っていた。

「ごめんね。時間がなくて手作りじゃないけど」

「ううん、すごく嬉しい。ありがとう」

仁人は袋からマフラーを取り出して、首にそっと巻きつける。普通のマフラーをする以上に温かいように感じる。

「ねえ、聞いて、仁人」

寄り添った状態で椎菜は仁人の耳元で囁く。仁人はくすぐったい感じを覚えながらも、黙って耳を傾ける。

「私、今日はどうしても楽しかった。素敵なものをたくさん見れたし、おいしいものもたくさん食べた。でも、一番は仁人とずっと一緒にいたから。もうそれだけで胸がはち切れそうになるくらい嬉しくて、心が温かくなるの」

椎菜はゆつくりと横を向いて、仁人を見つめる。仁人も同じように椎菜を見つめる。

「仁人、私やっぱり、仁人のことがすー」

言葉の途中で椎菜の口は動きを止める。仁人の人差し指がそっと当てられたから。

「僕も今日はどうしても楽しかった。いろんなものが見れたし、夕食もおいしかった。でも、それは隣に椎菜がいてくれたからだと思う。聞いて欲しい、僕の想い」

そこでそつと指を離して、繋いだ手をぎゅっと握り、空を見上げる。この手を通して、想いが伝わるように。

「僕には資格、恋人を作る資格がないって言ってた。そうやって、逃げていたんだ。女の子と付き合って、またあんな思いをしたくないから。でも、椎菜を初めて見たとき、すごくかわいいと思ったんだ。恥ずかしいけど、それが先月の話。全校生徒の前で堂々と話す椎菜の姿に僕は釘付けになった。それから椎菜と知り合って、話すようになって、惹かれる一方だった。でも、資格がないからって気持ちを押し殺してきた。椎菜が『好き』って言ってくれたのが嬉しかったのに拒んだ。先輩とのデートを見て、すごく悲しかった。悩んで、苦しんで、考えた。そうして、僕にもようやく分かったような気がするんだ」

そこで一旦区切った仁人はじつと椎菜の瞳を覗き込むように見つめる。椎菜は驚いたように目を丸くしながらも、真剣な表情で聞き入っている。仁人は小さく微笑んで続ける。

「ずっと相手できることが資格じゃない。本当の資格はその人を本気で愛すること。僕にあるか分からないけど、でも、自信はある」
そつと両手で椎菜の肩を抱き、真正面でお互い向かい合い、見つめ合う。

「好きだ、椎菜」

じつと椎菜の瞳を見つめ、はつきりとした口調で、自身の想いをぶつける。辿り着くまでに迷走を重ね、否定し、それでも沸きあがってきた想いを初めて相手に伝える。

「うん……うん」

止め処なく零れる涙を拭いながら、椎菜はただただ頷く。仁人の気持ち嬉しくて、どうしようもないくらい嬉しくて、椎菜は涙でぐちゃぐちゃになった顔で微笑む。

「私も、私も大好きだよ、仁人」

涙声で詰まりながら、椎菜は今まで何度も伝えた、伝えたけど届かなかった、でも今は届く想いを吐き出す。そして、懸命に笑顔に

しようとしている泣き顔で仁人に抱きつく。仁人も今回は優しく腕を回して抱きしめる。

二人の体温が一つになり、ふたつの唇も今一つへと重なっていく。

エピローグ

最後に粉雪がチラついてホワイトクリスマスとなった今年のクリスマスも終わりを迎えようとしている。陽が昇ると人々はクリスマスモードから一転して、年末となり正月雰囲気が漂い始める。

「温かいね」

「うん」

二本のマフラーを二人で一緒に巻いて小雪が舞う夜景を眺める。

お互いに片手ずつ手袋を着けて、もう片方の手は固く繋がれている。

「五……四……」

椎菜が携帯電話でカウントダウンを始める。

「三……二……」

終わらない時間はない。いくらそれを拒んだところで、人は未だに無力なのだから。仁人は少し寂しい思いを抱きながら、椎菜のカウントダウンを静かに聞く。

「一……ゼロ！」

クリスマスという楽しい時間が終わってしまったのに、椎菜は嬉しそうに最後の数字を口にする。そして、仁人のほうに向き直る。

「ハッピーバースデー、私の恋人」

椎菜は叫ぶと同時に、仁人に飛び込むように抱きつく。突然のことに、仁人は驚きながらもなんとか受け止めて抱きしめる。そして、二人は再びキスを交わす。

小雪が舞い降りる十二月二十六日。宮前 仁人、十七歳の誕生日である。

f
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0396v/>

恋する資格

2011年7月20日03時12分発行